

# 富山城跡第2次調査報告

昭和44年3月

富山城跡調査団

## 序

近年における急激な地域開発は数多くの貴重な文化財を破壊し、また現在破壊される寸前にあるものが多く、関係者を憂慮させている現況であります。岡山市教育委員会においても、地域開発から文化財を保護し、あわせて文化財の活用と文化財保護思想の普及のため、各種の施策を行なってきています。

今回2回にわたって実施した富山城跡の発掘調査は、万成石として知られている花崗岩の採掘により城跡の主要部分が崩壊寸前の状態にあるので、早急に詳細な学術調査を行ない記録として保存するため、国と県の補助金を得て実施したものであります。

富山城跡は郷土史上重要な地位を占めるもので、中世山城から近世平山城に移行する城郭構築の変遷を解明するうえに重要な手がかりとなる遺跡であります。今回の調査は、すでに完全に破壊されている城郭北部および周辺部と、今後当分の間は破壊される恐れがないであろうと思われる城郭南部を除き、中央の主要部についてのみ調査を行なったものであり、その結果中世城郭の貴重な遺構がほぼ明らかにされました。この報告書は、調査結果を記録としてまとめたもので、紙数の関係などで割愛した部分もあり、不充分な点もあると思いますが、今後の城郭研究の参考資料としてご活用くださいますならば 幸いと存じます。

なお、この機会に富山城跡発掘調査に直接たずさわってくださいました水内昌康調査団長をはじめ調査団の方々、およびご協力いただきました関係者の各位に対し心から敬意と感謝の意を表するしだいです。

昭和44年3月

岡山市教育委員会事務局  
社会教育課長

松本 猛

## 例　　言

- 1、この報告書は、岡山市教育委員会により編成された富山城跡発掘調査団が、昭和43年10月と昭和44年3月の二期に分けて実施した岡山市矢板山、富山城跡の第二次発掘調査に関するものである。
- 2、この報告書は、第一次調査報告書に継続するものであるが、第一章については再録している。
- 3、この報告の執筆は、第一章を巖津政右衛門、第二章を水内昌康、第三・第四章を出宮徳尚、第五章を水内、出宮が分担した。編集は出宮があたった。
- 4、遺物の整理、実測と写真撮影、および実測図の淨写は出宮がおこなった。
- 5、古岡、および本文中の城跡各個所名は調査にあたり付した仮称である。

## 目 次

第一 章	富山城とその歴史 .....	1 頁
第二 章	調査の経過 .....	6 頁
第三 章	遺 構 .....	10 頁
第四 章	遺 物 .....	22 頁
第五 章	結 語 .....	38 頁

## 図 版

- 図版第1、① 富山城跡全景  
② 富山城古絵図
- 図版第2、① 本丸礎石列(浮田時代)  
② 本丸礎石比較
- 図版第3、① 本丸北上石垣  
② 本丸北下石垣
- 図版第4、① 踏石状敷石  
② 本丸西上石垣  
③ 本丸瓦、カワラケ出土状態
- 図版第5、① 本丸城門石垣  
② 本丸城門楕形奥仕切
- 図版第6、① 本丸礎石(松田後期)  
② 本丸北掘り切り(松田後期)
- 図版第7、① 本丸版築(タ)  
② 本丸瓦出土状態(タ)  
③ 本丸遺物出土状態(タ)
- 図版第8、① 本丸カワラケ出土状態(タ)  
② 本丸漆幕出土状態(タ)  
③ 本丸礎石片(タ)
- 図版第9、① 大手曲輪礎石(浮田時代)  
② 大手曲輪溝(タ)
- 図版第10、① 大手曲輪石壙状列石(タ)  
② タ(タ)
- 図版第11、① 大手曲輪地形基礎(タ)  
② 大手曲輪池(タ)
- 図版第12、① 大手曲輪東列石状石壙(タ)  
② 大手曲輪瓦出土状態(タ)
- 図版第13、① 大手曲輪コ字形石組(タ)  
② T3-6中トレンチ西壁(タ)
- 図版第14、① 二の丸上列石(タ)

- |                    |          |
|--------------------|----------|
| ② 二の丸下石垣           | ( タ )    |
| 図版第15、① 二の丸池       | ( タ )    |
| ② 二の丸備前焼出土状態 ( タ ) |          |
| ③ 同上内部             | ( タ )    |
| 図版第16、遺物、瓦         | ( タ )    |
| 図版第17、遺物、鉄釘等       | ( タ )    |
| 図版第18、遺物、鉄釘等       | ( タ )    |
| 図版第19、遺物、硯他        | ( タ )    |
| 図版第20、遺物、磁器        | ( タ )    |
| 図版第21、遺物、支那銭他      | ( タ )    |
| 図版第22、遺物、鉄釘他       | ( 松田後期 ) |
| 図版第23、遺物、磁器        | ( タ )    |
| 図版第24、遺物、瓦、銃弾他     | ( タ )    |
| 図版第25、遺物、カワラケ      |          |

## 挿 図

第 1 図 富山城跡周辺地形図	2 頁
第 2 図 富山城跡図	4 頁
第 3 図 発掘状態	7 頁
第 4 図 タ	9 頁
第 5 図 測量図 (付古城図)	挿頁 1
第 6 図 本丸石列実測図	挿頁 2
第 7 図 本丸北下石垣実測図	挿頁 3
第 8 図 T <sub>1</sub> -1 ~ T <sub>1</sub> -2 中トレンチ西壁実測図	タ
第 9 図 T <sub>1</sub> -1 西トレンチ西壁実測図	タ
第 10 図 T <sub>1</sub> -1 南トレンチ礎石実測図	タ
第 11 図 本丸南石垣、城門実測図	挿頁 4
第 12 図 T <sub>2</sub> -1、T <sub>2</sub> -2、T <sub>2</sub> -3 トレンチ東壁実測図	タ
第 13 図 T <sub>1</sub> -E <sub>1</sub> ・T <sub>1</sub> -2 中トレンチ南壁実測図	挿頁 5
第 14 図 T <sub>1</sub> -W <sub>6</sub> トレンチ南壁実測図	タ
第 15 図 T <sub>1</sub> -W <sub>6</sub> 、T <sub>1</sub> -E <sub>3</sub> トレンチ北壁実測図	タ
第 16 図 本丸北上石垣実測図	タ
第 17 図 T <sub>2</sub> -6 南、中、北トレンチ西壁実測図	挿頁 6
第 18 図 T <sub>2</sub> -5 南、中、北トレンチ東壁実測図	タ
第 19 図 T <sub>2</sub> -4 トレンチ礎石実測図	タ
第 20 図 T <sub>2</sub> -W <sub>6</sub> 地形基礎実測図	タ
第 21 図 S <sub>1</sub> 、S <sub>2</sub> トレンチ東壁実測図	タ
第 22 図 S <sub>3</sub> 、S <sub>4</sub> トレンチ北壁実測図	タ

第 23 図	T <sub>2</sub> —E <sub>4</sub> トレンチ南壁実測図	挿頁7
第 24 図	T <sub>2</sub> —E <sub>4</sub> トレンチ東端北壁実測図	タ
第 25 図	T <sub>2</sub> —W <sub>6</sub> トレンチ西端南壁実測図	タ
第 26 図	コ字形石組実測図	16頁
第 27 図	池実測図	挿頁7
第 28 図	T <sub>3</sub> —N <sub>6</sub> 池実測図	挿頁8
第 29 図	T <sub>3</sub> —S <sub>1</sub> トレンチ東壁実測図	タ
第 30 図	T <sub>3</sub> —S <sub>2</sub> トレンチ西壁実測図	タ
第 31 図	土壙、石垣模式図	11頁
第 32 図	瓦拓本実測図（浮田時代）	23頁
第 33 図	鉄釘、鉄片実測図（浮田時代）	24頁
第 34 図	武具実測図（浮田時代）	25頁
第 35 図	磁器片実測図（浮田時代）	26頁
第 36 図	備前焼実測図（浮田時代）	27頁
第 37 図	カワラケ実測図（浮田時代）	29頁
第 38 図	支那銭拓本	29頁
第 39 図	手あぶり実測図	30頁
第 40 図	風炉状土製品実測図	タ
第 41 図	鉄皿実測図	タ
第 42 図	石皿実測図	タ
第 43 図	土鍤実測図	タ
第 44 図	硯実測図	31頁
第 45 図	土釜、土鍋？実測図	タ
第 46 図	瓦拓本（松田後期）	32頁
第 47 図	鉄釘、鉄片等実測図（松田後期）	*
第 48 図	貝殻留金具実測図	33頁
第 49 図	磁器等実測図（松田後期）	34頁
第 50 図	備前焼実測図（松田後期）	35頁
第 51 図	カワラケ実測図（松田後期）	37頁
第 52 図	北の丸残景	40頁

# 第一章 富山城とその歴史

## 1 概観

富山城は岡山市西部にある矢坂山の山上に築いた中世の山城をいう。この城は標高1296メートルの山頂を基点とし、ほぼ南北の線にのびた尾根の上に帯状に繩張りを行ない、本丸をはじめ大小10を数える曲輪をつらね、要所々々に櫓や城門を構えて防備を厳重にした典型的な山城で、南北の長さ約300メートル、東西の幅約50メートル乃至10メートル、東北の竜王口、西北の矢坂口、南方の大安寺口の三方に道を通じていた。

矢坂山の周辺は古代の条里制の跡をのこす豊穣な平野で、中世までの山陽道（西国往来）は、北方の鷲津の山塊を北へ越えた富原地内を東西に通じており、城からの距離約3キロメートルまた備前備中の国境線は西方約4キロメートルの地点を南北に走っている。まことに岡山平野に勢力を張る城砦として絶好の要衝を占めており、その規模も近在にある中世の城砦中群を抜くものであった。

## 2 沿革について

富山城を文献に見るのは江戸時代に入ってからである。その多くは城主とか城名あるいは攻防の戦いを軍記風に記したもので、とくにこの城を内容に亘って研究した記録は発見されていない。古文献中時代も古く、比較的詳しく書かれたのが宝永6年（1709）に高木太亮軒の編述した「和氣綱」である。その第三巻三野郡の条に次ぎのように述べている。

一、富山城、昔富山山城大操作成仍号す。万成山の上の山地（大安寺とも）松田左近将監數代之を領す。松田記に曰、備前一乱以後山名相模守領知として小鶴大和代官たり。福岡を構へ居城たりしが、細川勝元計略にて松田左近将監一族若党相供し、福岡に押寄せる。赤松が郎党ども数年の遺恨を散せんと、彼与力して則小鶴を追落し、本国たるに依て赤松政則知行し、軍巧の賞として伊福郷を松田に給はる。則富山城を築く。大乱の最中なれば一族共を催し西備前を數ヶ所横領すといふ。案するに松田は金川に十二代主たりといふ。元成は右の八代目也。松田氏滅亡の時は此城は老臣横井土佐居するなり。

天正の初より浮田左京亮忠家居城、入道して安心といふ。直家の弟也。暫有て息左京亮に城知共譲り其身は大坂に詰、罷近す、終大坂にて死す。（以下左京亮すなわち後の坂崎出羽守信頼の悲運な略伝を添えている）

最初の築城者だとする富山大掾は三野郡の總社の惣宮であったが、富山氏の系脈は矢坂にのこり、その本家は總社の旧地を屋敷にして住み、代々同地の八幡宮の宮祠を勤めている。同家の家譜（火災に罹り近年再調）の中に、

創祖 富山大掾重興、光孝天皇仁和年中、備前三野郡矢坂山を城地として築き富山城と名づく。その後凡そ六百年延仁元年、細川勝元、山名宗全と權を京に争ふ（中略）、富山備中長賴文明年中に松田勢の攻撃を受け防禦成らず、城の四方に火を放ちて自害す。文明五年元降死す。その子左近将監元成居城、文明十年（十五年）津高郡金川へ移る。依て老臣横井土佐を置く。

## 富山城跡周辺地形図



(第1図) 富山城跡周辺地形図

(1/75,000, 富山城跡周辺地形図)

このような一節がある。また矢坂の八幡宮の社記には、寛平年中に矢坂山の城主富山大掾重興が山城國男山八幡宮を勧請、山続きの万成山の頂上に祀り、この地方の鎮守とした。文明年中富山城が松田氏に奪われると、富山氏は矢坂に土着したが、江戸時代になって、寛文九年に池田光政が富山越後守吉隆をこの八幡宮の祠官に取立て、社殿を再興した。また総社はのちに八幡宮の境内に移して摂社とした、と述べている。

これらの文献で凡その判断ができるが、松田記なども参考に加えて説明してみると、平安時代から三野郡に本拠をもった富山氏が、中世に入って武士となり、いつか矢坂山に城砦を構えて勢力を張った。たまたま備前金川に居る松田元隆が応仁、文明の乱に際し、細川方の赤松氏に加担して、備前の福岡城にいる山名の代官小鶴大和を攻めて軍功を樹てた。その賞として三野郡伊福郷を所領することになり、此地の旧勢力富山氏を追うて居城を奪い、城郭を修築して金川城から引き移った。元隆が死ぬるとその子元成が跡を継いで城主となつたが、彼は赤松の傘下に満足せず、機を見て備前一円を領有したい野望があったので、文明15年になると地理的に有利な金川の城に帰り、富山城には弟の惣右衛門元親を入れて守らせた。

元親は文明17年2月の福岡合戦に出陣して戦死し、あとはその子の親家が惣右衛門を襲名して富山城主となる。明応6年浦上宗助が西備前に進攻、牧石に陣取って富山城を攻めたとき親家は老臣横井土佐などと籠城して勇敢に防戦した。その後横井土佐がこの城を守備し、また金川十一代の城主松田元盛の二男、左衛門尉盛明も在城して、金川の本城と連絡しながら備前西境の防備に当った。ただし永禄12年7月、宇喜多直家に攻められて金川が落城したとき、盛明は金川城に居たが富山城へは帰ることができず、間道から備中へ脱出している。

松田氏の滅亡とともに富山城は宇喜多氏に移り、直家は異母弟の浮田忠家を城主として守らせた。この城は岡山城の西方1里余の丘陵上にあり、直家は初め富山城に據って城下町をつくる計画を抱いていたと云われるほどこの城の重要性を認めていたので、従来の城をさらに修補拡張して、強固な城郭に仕上げた。忠家の隠居後、その子左京亮が城主になると、南の平地にできた自然環濠を利用して根小屋を設け、平素の居館とした。この環濠を大河と呼び、その内が野殿村となる。

慶長5年宇喜多氏が没落したあと、岡山城には小早川秀秋が筑前名島から移って城主となり、富山城も彼の領有に帰した。しかし徳川家康が一国一城の制を布く予備工作として、各大名に領国内の不用の城を破棄させたので、富山城も慶長6.7年のあいだに廢城となり、櫓や城門の一部は岡山城に引き取った。戦災で焼失した石山門は富山城の大手門だったという説がある。

### 3 城郭について

富山城の櫓張りや曲輪の規模については、具体的に記した文献に乏しく、その概要を知り得るのは大正年間に刊行の『吉備群書集成』第一巻に収めた備前古城絵図の中の「富山城古図」(第5図)であろう。この絵図も編者が付言しているように、作者も作成年代も不明で、江戸中末期に備前藩の軍学者の手に成ったものではないかと推測される程度であるが、城址を実測した見取図として信憑度の高い史料である。

この絵図によると、矢坂山の頂点の北(約60メートル)に中心を置き、こ、に南北15間、

東西（中央にて）13間の曲輪をつくりて本丸とし、その北に南北14間、東西8間の曲輪、さらに北に続いて南北17間東西7間の曲輪を設けて北の丸と呼ぶ。次ぎに本丸の南には一段低く南北20間東西7.5間の曲輪をつくり、その南には一段高く南北13間東西17間の曲輪があり、これを二の丸（仮称）と呼んでおく。これら南北の線にのびた一連の曲輪の両側面には、細長い段形が断続しており、その東側に見える二三の段は、初めて帯状に連って馬場を構成していたものと考えられる。

また二の丸から南方に離れた尾根の上にも南北13間東西9間の曲輪があり、出丸と称する。

この南の丸と二の丸との間は深く掘って通じ、平素この掘切には木橋を架けて連絡していた。

このほか西側の山腹には、檜台と註記した孤立の小櫓跡が四カ所あり、このうち南寄りの三カ所は本丸の西側から出た通路によって連絡、北端の一つは北の丸に道が通じている。

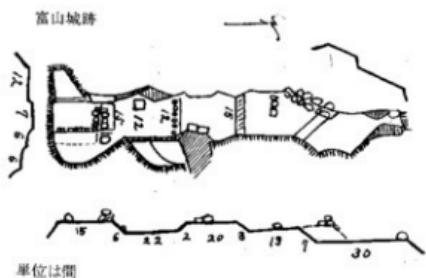
以上の古絵図に見える大小の曲輪は、その周辺に土居を築きまわして防禦にあて、いたようで、土堀らしいものが見えない。また本丸とその南の曲輪の接合点には石垣を積んでいる。けだし、この城は山の側面を峻急に削り落しただけでなく、地形に応じて石垣を積んでいたようで、その残欠が今も諸所に遺存している。

山城に大切な水の手については、古図にしるしていないが、南の丸を西に下った谷間に鰐ヶ池と称する溜池がありあり、この池が富山城の水の手であったと伝えられる。いま1カ所、本丸の西側を約60メートル下った地点に、岩石の下から湧出する泉があった。この泉がまた富山城の「かくし水の手」と伝われる。

つぎに城外との通路である。この古絵図には、本丸の南にある曲輪の東側から、東の谷間にくだり道と、出丸の北端から谷間にくだり東南へ通じた道の二線が書き入れてある。

しかし実際には北の竜王口と、北西の矢坂口および南の大安寺口の三方から通路があった。このうち竜王口、矢坂口の二線は近年になって石材や土砂の採取が激しく地形を一変したため途中で消えてしまい、大安寺口から登る山道だけが昔のまゝ残っている。

また古絵図で見ると本丸の南の曲輪から東へ下った道が大手に当るようであるが、市役所備え付けの現行地図「大安寺」の地割りを見ると、南麓大安寺部落にある大然寺の背後に当る地点に「大手」の地名をのこしているので、この「大手」が富山城に關係あるとすれば出丸から東西に下った道がさらに南に



昭和11年版岡山市史第2巻による

第2図 富山城跡図

向い、大安寺の家並にくだってゆく。即ち大安寺口の道が大手を示唆するもの、ようである。この城の末期に設けられた野殿の根小屋との連絡も、大安寺口道によっている。

終りに、昭和11年3月岡山市役所の発行した岡山市史第二巻に掲載してある永山卯三郎実測の富山城址見取図について一言加えたい。

矢坂山は明治以降万成石の採掘が盛んに行なわれ、近年に入って一層激しく、石材だけでなく土砂まで採取されるので、城址の周辺もまた著しく削り取られて山容、地形を一変するに至った。しかし昭和10年前後の実測と考えられる永山氏の見取図を見ると、諸所に削られて絶壁となったカ所は見えるが、それでもなお、本丸を中心にして南北に長く展開した城址はほぼ旧態を存しており、これを吉備群書集成所載の古絵図と対比するとき、概して各曲輪の位置や大きさが合致するばかりでなく、各曲輪の平面の記録に正確を期したこと、断面図により地形の高低を示したこと、南の丸に長方形をなす櫓跡を書き入れてあることなど、富山城跡の研究に欠くことのできぬ史料とされるものである。

(巖津政右衛門)

## 第二章 調査の経過

昭和43年9月21日、岡山市教育委員会主催のもとに、富山城跡第二次発掘調査の打ち合せ会が市庁舎で開かれた。市教育委員会から第一次調査にもとづいて第二次調査の方針が説明された。

第一次調査では、城跡全域の実測と、本丸と本丸北曲輪との間にある石垣（本丸北下石垣）の露呈、さらに全表面残存造構の調査に終ったが、中世城郭の遺構が予想以上に残っていることを確認したので、第二次調査では、城跡の主要部の発掘〔発掘面積800m<sup>2</sup>〕、測量、地表調査を行ない、将来保存に対する、城郭遺構資料をまとめることになった。さらに、調査期日、調査団の編成などについて決定をみた。調査期日は一応昭和43年10月10日から1ヶ月の予定とした。

### 第二次調査団の編成

顧問 和島誠一 (岡山大学法文学部教授)

西原礼之助 (岡山市文化財専門委員長)

団長 水内昌康 (岡山市文化財専門委員)

#### 調査担当者

巖津政右衛門 (岡山市文化財専門委員)

春成秀爾 (岡山大学法文学部助手)

石丸洋 (藤原宮址調査員)

松本猛 (岡山市教委社会教育課長)

浅原健 (岡山市教委社会教育課文係長)

出宮徳尚 (岡山市教委社会教育課)

また調査期間中の協力者として、近藤義郎（岡山大学法文学部助教授）、高橋謙（岡山県教委社会教育課）、小野一臣（玉島高校教諭）、多和史彦（関西高校教諭）、根岸純一（石井中学校教諭）、大塚元勝（操山中学校教諭）、赤木庚（旭東中学校教頭）、内田一正（東山中学校教諭）、前田幹（岡北中学校教諭）、池薺須藤樹（丸の内中学校教諭）、近藤節也（福田小学校教諭）、難波俊成、西尾勝義（西尾石材店主）、光田彪（光田石材店主）、大野小学校

岡山大学生〔中村義市、藤田憲司、松永初、赤塚育子、岡克子、但馬秀三、村上秀明、東潮原田環、岡本俊朗、堤諭吉、中山俊紀、徳増広行、石塚二侍子〕の諸氏のご援助をいたゞき、また、玉島高校、倉敷商業、関西高校、岡山工業、大安寺高校社会科研究部、岡北中学校、石井中学校の学生生徒諸君、および、地元の三宅博士さんや、各町内会長さん方の献身的なご支援をいただいたことを厚く感謝いたします。

また、遺物整理にあたっては、中村義市君をはじめ岡大学生諸君の真摯なご協力に対し厚くお礼を申します。

## 1. 第二次調査の目標

だいたい、第一次調査によって富山城跡の地表上の残存遺構の性格についてはかなり詳細な点まで確認することができた。したがって、第二次調査では、南の丸と掘り切りとを除く全曲輪の発掘を実施して、松田氏から浮田氏にかけての遺構の変遷過程を究明することを目標とした。時代的にみて、文明年間から慶長年間にいたる期間と予想されるので、丁度、社会的には守護大名から、戦国大名へと領国一円支配の体制に向って変動する社会であり、その中で居館的性格の城郭も次第に戦略的、防禦的性格を強めながら近世的規模をもった居城に発展する状態を遺構を通じて把握できればと願った。

さらに、今次調査の成果の活用であるが、現在、抹石のために破壊に頼している曲輪（本丸、北曲輪、大手曲輪、二の丸 等）については一応資料は整理されて残るにしても、遺構は早晩、抹石のために完全に破壊されることは確実である。今次調査の成果の一端として、中世から近世へかけての城郭築城変遷の過程が究明されたうえは、単に記録資料としてとめるのみでなく、遺構保存のための具体的対策に活用する資料となることを切望する。

## 2. 経過

今次調査では、南の丸、掘り切り、を除く全曲輪発掘を計画した。そのためにトレーンチを次のように設けた。

(1) T<sub>1</sub> 系トレーンチ (長さ30m巾1.5m)

本丸中央部から北に向って本丸北曲輪の中央を貫く。

(2) T<sub>2</sub> 系トレーンチ

本丸中央部から南に向って、大手曲輪の南端に達する。(長さ70m 巾1.5m)

(3) T<sub>3</sub> 系トレーンチ

二の丸中央部を北東から西南に向って、のびる。(長さ50m 巾1.5m)

(4) S 区

大手曲輪の東南隅 (池のある所)

前期作業 (昭和43年10月10日～11月12日)

最初の計画では10月10日から1ヶ月の予定で全部完了する積りであったが、山地であるため発掘が困難であったり、作業員の都合によりて、

1ヶ月では完了しきれないことがわかり、予定を変更して、T<sub>3</sub>系トレーンチの南端で作業を打ち切ることにし残りのS区 T<sub>3</sub>系トレーンチは、昭和44年

3月から後期作業として再び調査することにした。

前期作業中、とくに留意した点は、



第3図 発掘状態

本丸(第5図)を中心とした松田氏時代と浮田氏時代の層位の追究であった。層位が明確に把握できたのはT<sub>3</sub>系トレンチとT<sub>4</sub>系トレンチの北半分であった。T<sub>3</sub>系トレンチの拡張、掘り下げによって、浮田、松田、両時代の生活跡を推定さす日常生活用品が相当量検出されたので後期の作業にうつっても、T<sub>3</sub>系トレンチの拡張、掘り下げを続行せざるをえなかった。なかでも、松田氏時代の後期頃の層から検出された陶磁器のうち明時代と推定される磁器片(白磁、青磁、染めつけ、などの皿、碗、茶器等の破片)がかなりあった。これら磁器片の磁胎は、相當鐵蜜なもので、中には花文とともにうるものも検出されている。最近調査された各地の城跡、船跡<sub>①</sub>などから渡来磁器類が出土していることが報告されているが、今後、中世城郭調査の場合比較検討される資料として貴重なものとなるであろう。

また、層位追究の過程で知りえたことは、常識的に考えて、山頂を利用して山城を構築するのであるから前の時代の遺構は除去し、脊梁を削平して新しく構築を行なうように考えられるが必ずしもそうではなく、前の遺構の上に盛土を行ない新しく建物を構築する場合もあることが、本丸を中心とした層位追究の過程で確認することができた。

城郭の防衛生命ともいるべき、石垣、版築の築造過程は、本丸の北石垣、二の丸縁石垣にその築造過程をうかがえる遺構をとめていた。

10月16日からT<sub>3</sub>系トレンチの作業にはいり、本丸の南に位置する門付近、さらに、大手曲輪の礎石列、石壘列石、溝、地形列石など、大手曲輪の遺構の発掘にとりかかった。この大手曲輪は採石のために東西両斜面が削りとられて幅狭くなっている。さいわい列石の遺構は残っていたが、西側斜面が削りとられているので、もとの配石状態を推定することは困難であった。しかし、大手出曲輪から入った場合、正面にあたるこれら石列上に建造物が配せられていたことは予想できる。11月1日からはT<sub>3</sub>系トレンチの一部拡張、掘り下げ続行作業を残して、実測作業にはいり、11月12日に一応調査を打ちきり、昭和44年3月から後期の調査を実施する予定にした。

#### 後期作業(昭和44年3月8日～3月28日)。

3月8日から作業を始め、本丸、および、本丸北曲輪のT<sub>3</sub>系トレンチを中心に、拡張、掘り下げを続行し、松田氏時代の層位の追究、さらに、本丸北上石垣、本丸北下石垣、版築の相互関係、時代関係について調査を行った。一方3月10からS区(大手曲輪東南隅)の池の発掘にかかった。戦前までは、このS区一帯は低窪地で、たえず湿地状態であったが、現在では落葉と土で埋まり平坦面とあまり変わらない状態になっていた。池からは軒丸瓦片、備前焼破片、角礫などが検出されたが、期待された木器類はまったく発見されなかった。

3月11日から二の丸のT<sub>3</sub>系トレンチの発掘にかかった。二の丸の平坦部では明確な遺構は発見されず、したがって、南縁の石垣と土堀との構築関係、T<sub>3</sub>—N<sub>2</sub>の池の状態、T<sub>3</sub>—N<sub>1</sub>で発見された備前焼の甕(中から板が検出された)の実測などが作業の主なものであった。

なかでも、二の丸南縁の上下二重に構築された石垣と、さらに土堀とを組みあわせた防衛構造は、

他の山城の防禦構造が調査されるにしたがって参考とされる遺構である。T<sub>3</sub>-N<sub>2</sub>の池も調査の結果S区の池と同様木器類の残存はまったく見られなかった。二の丸腰曲輪の調査も含めて3月20日で一応発掘調査を中止し、あとは断面図、実測、平板測量など整理段階にはいり、トレンチの埋めもどしを行ない、3月28日調査器材の整理と出土品の運搬を行ない、延べ53日間にわたる第二次調査を完了した。



第4図 発掘状態

#### 付 記

今回の調査中、香川県三豊郡施間町大字施間に住む富山喜三男氏から岡山市教委に連絡があり、富山城の古絵図を氏が所蔵しているので調査の参考にしてほしいとのことで、昭和43年11月26日、水内、浅原、出宮の三名で調査に出向いた。調査の結果、江戸中期以前のものと推定された。これまで富山城の古絵図としては、「古編群書集成」の中の絵地図を参考にしていたが、富山氏所蔵の地図の方がや、詳しく画かれており、記入事項も詳しいようである。例えば、各曲輪も坪数で表記され、さらに、「土居を除く」と注が入れられてある。したがって、発掘調査の場合、各曲輪に土居が構築されていたことを想定しながら調査をすゝめることができた。

(水内昌康)

#### 註

- ① 大阪府池田市……池田城址の調査
- 福井県足羽郡足羽町……朝倉氏跡の調査
- 埼玉県北足立郡桶川町……加納城址の調査

### 第三章 遺構

富山城とその城主に関する文献史料は、江戸時代に作成された備前軍記等の軍記物や地誌等に収録されているもので、原史料の戦国時代の文献史料は現在のところ発見されていない。したがって中世から戦国時代にかけての富山城の変遷、城郭の変革は、史料的に判然としないが、一応、富山氏による築城→松田氏の入城による改築→浮田氏の入城による改築→小早川氏による廃城という変遷をたどることができる。<sup>①</sup>最後の小早川氏は、慶長5年（1600）末に備前守となり、慶長6、7年に富山城を廃城とし、城郭建築物の一部を岡山城へ移築した、と伝えられ<sup>②</sup>小早川氏による富山城の改築使用は考えられない。したがって富山城が城郭としての意義をもち、使用されたのは浮田氏の時代までで富山城の最終城郭形態は浮田氏の時代に形成されたものと考えられる。

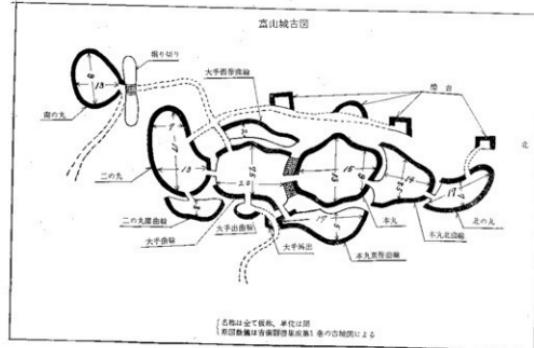
今回発掘調査をおこなった本丸北曲輪、本丸、大手曲輪、大手出曲輪、二の丸、二の丸腰曲輪<sup>③</sup>（第5図）の状態をみると、層位的に時期区分ができるのは本丸と大手曲輪の北半分だけで、他は表土直下に地山があり層位関係は存在しない。つまり、本丸、大手曲輪北半分は、この城の最終改築時（=浮田時代<sup>④</sup>）に前時期（=松田時代）の生活面の上に盛土造成をして改築をし、他はその時に削平されたことを示している。

#### 1. 本丸の遺構

##### （1）浮田時代（永禄11年（1568）～慶長5年（1600）

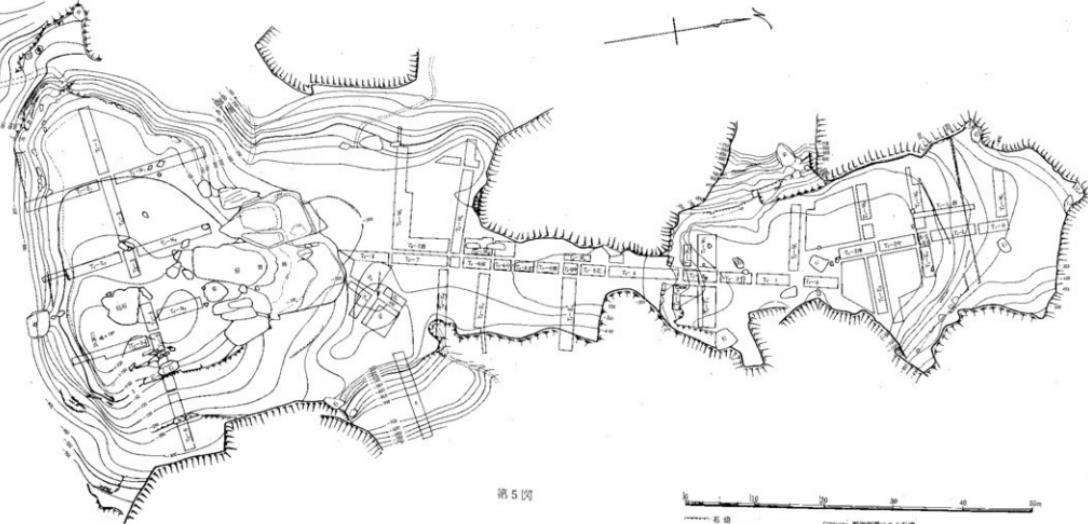
本丸の層位関係は、T<sub>1</sub>系トレチで基本的に三層に分かれ、表土自然堆積土層直下の最上層（=第1層）はこの城の最終改築使用層で浮田時代に比定できる。この第1層=浮田層にともなう遺構は、礎石列、石垣門跡、版築、踏石状敷石等多数が発掘により発見された。

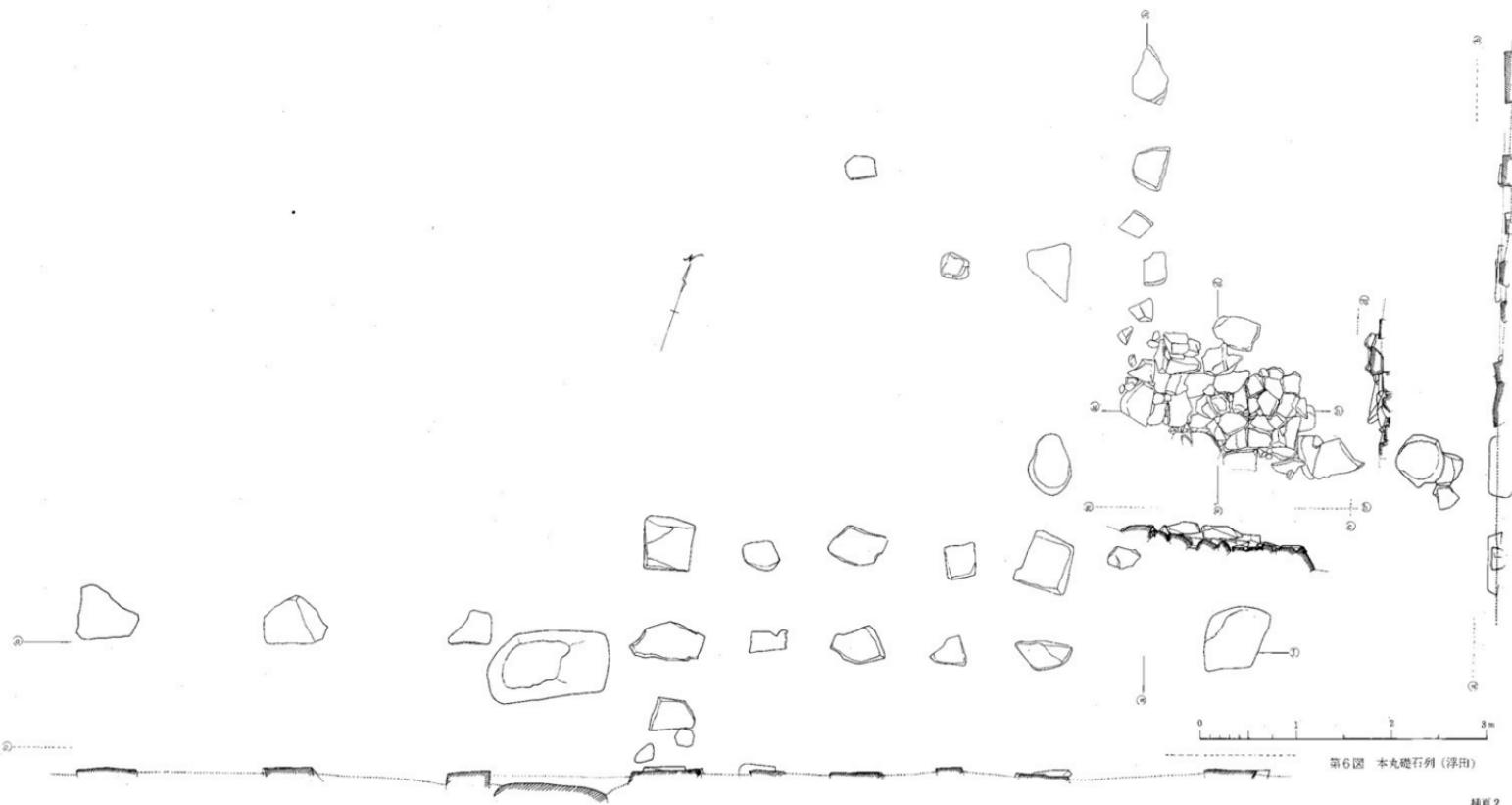
礎石列（第6図・図版第2）本丸北半分に集中して残存し、礎石、塙石が交互に並んで直交する礎石列を形成しているが、残存しているのは、東側と南側の東南部だけで西側、北側は破損し、また一部未掘のためその全貌は明らかではない。この礎石列の現状は、礎石中心間で南北約12m、東西約10m（南北方向は中央では約11m）の長さがあり、南側の礎石列は、礎石中心間1m、塙石中心間0.9mの巾で平行に二重に並ぶ。東側も巾1mで礎石、塙石が二重に並ぶが、全体的に内側に大きな礎石があり、外側に塙石的な小さな石が並んでいるが、一部破損があり南側ほど顕著な礎石、塙石列を呈さない。南側の礎石中心間は内外とも2m、塙石中心間は1.9～2.0mで、礎石、塙石中心間は0.9～1mであり、東側の礎石中心間、塙石中心間も2mである。東外側礎石列の南部に接して東へ現状で巾1m、長さ1.5mの踏石状敷石があり、その両端（特に南側がよく残存している）に礎石、塙石が礎石列の東西方向にのっつて0.9～1m間隔で並んでいる。全体的に礎石列南北方向は、現在の磁北に対しても約20度西に振っている。この礎石列の南の門近くにも礎石（遊離）が存在しており、門近くにも礎



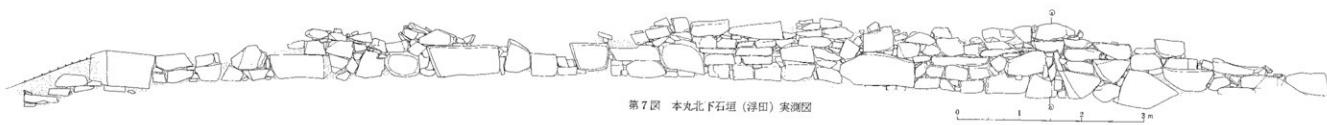
富山城跡測量図

S=1/600

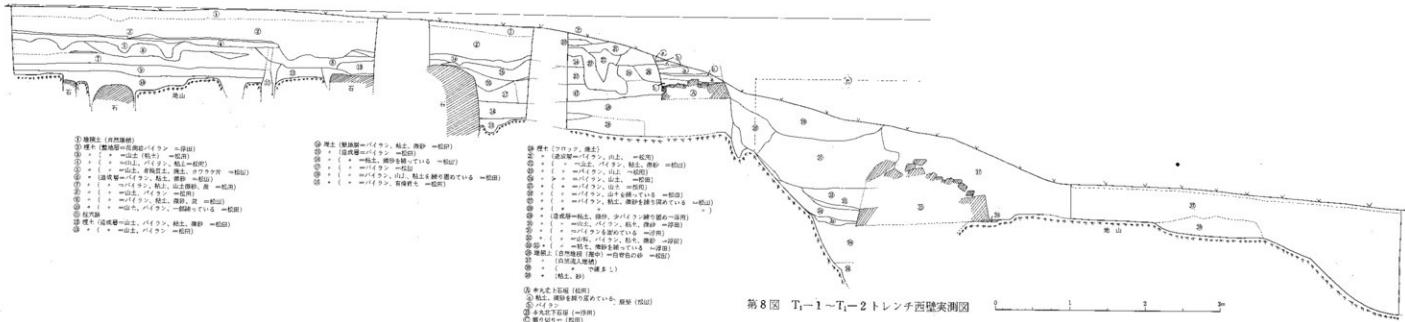




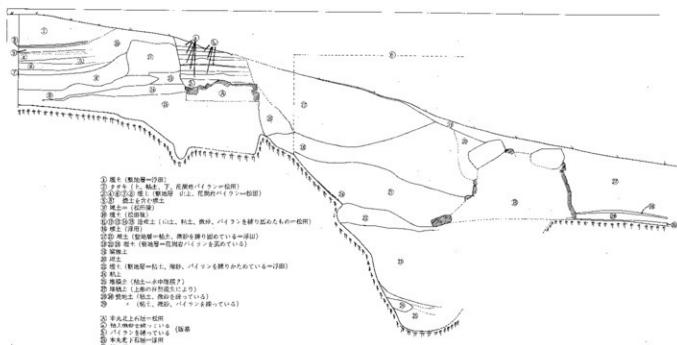
第6図 本丸礎石列（浮田）



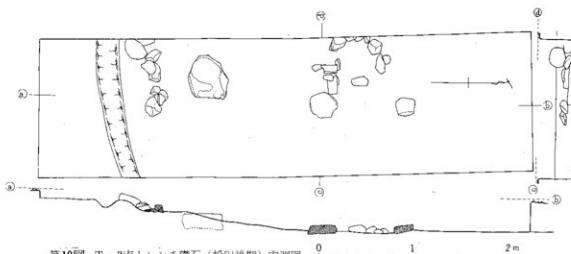
第7図 東丸北下石垣（浮田）寒測図



第8図  $T_1-1 \sim T_1-2$  トレンチ西壁実測図



第9図 T=1 でトレンチ型膜を測定

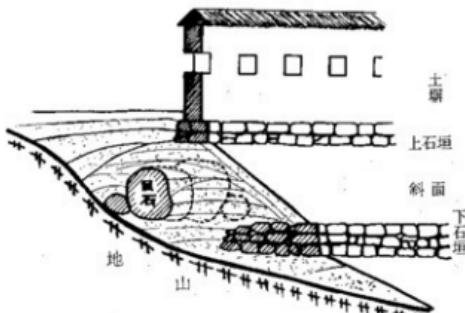


第10図 T=2南トレンチ礫石（松田後期）実測図

石の配置が存在していたと考えられる。全体的に本丸の第1層には掘立柱の柱穴は発見されず、掘立柱は使用されていないようである。

石垣・本丸は、周囲を石垣で堅め、南に大手に通じる城門が存在した。南側の石垣は、門の両脇を残してその両端が破壊され、特に本丸東側石垣は完全に破壊され、一部控積の「ぐり石」を残すのみである。北側の本丸北曲輪との境の本丸北下石垣（第7図）は現状最高1.5mで、第1次調査の段階では2mを越えるものではないと考えた<sup>(3)</sup>が、今回T1-1、T1-1西トレチ（第8、9図）で確認した結果、この石垣は第1層上面にともなうことが判明し、近くの礎石の高さをもとに復原すると2.5～2.6mの高さの石垣が存在していたと考えられる。この高さであれば対人的防禦機能を十分果し、さらに石垣上の土塀の存在を考えればその機能はより高く十二分である。本丸北下石垣の基本的石積法は、削り石を横に並べ横面で石垣の面を取る野面積的な築き方で、石垣の控積の巾は底部で約1.7m、高さ1mの所で1.3mである。この石垣の東部は、斜めに低くされ上部は平石で平坦にされており石垣面より1.65m内側に別の石垣が築かれていることからみて通路になっていたのではないかと推定される。本丸西側の上下の石垣についても第1次調査では上下を分離して考えていたが<sup>(4)</sup>これは本来上下の石垣とその間の土斜面で一つの石垣を形成するもので、石垣と土居を併用した型の変形なものとみることができる。つまり、石垣、土居併用型の外側斜面だけを利用した形で、下部の固めとして高さ1m程の石垣を築き、この上に土居状斜面を造成し、この上端部に低い二・三段積の列石状石垣を築きこの上に土塀を築いたもので、上石垣の内側は土居の様に下らずそのまま、平坦にされたもので、山城に於ける土居、石垣併用とみることができる（第31図）。なお、本丸北上石垣は松田時代の残存構造であることが確認された（松田時代で詳述）。

門・本丸南側石垣の中央に巾2.6mの城門の跡があり、この南側の石垣（第11図）は、破壊が著しく現状高1.6mであるが、礎石や平坦部との対比からみて本丸北下石垣と同じく約2.5m程の高さであったと推定される。石垣の城門は、両側が内に曲り樹形を形成する。東側の内に曲った石垣は、若干東に振り南側の石垣より一段低く、北にゆるやかに斜上し、その長さは約3mで高さは当時の地表から約0.5mである。門の石垣入口から約5m奥に樹形の突當にあたる所に基礎状の石積があり、この石積は小口積で南北両外面に面を取り巾約2.3mで長さは破損のためはっきりしないが現状で1.5mである。この石積の西端と門の石垣西側東端の間は粘土、砂、山土、花崗岩バイランの互層で造成された版築によって固めら



第31図 土居状斜面模式図

れている。以上からみて門及びその内側の樹形は、若干東に歪んだ形で西側は土塀（又は土居）、北奥は西土塀に続く基礎状石積とその上の土塀（又は塗籠壁）、東側は石垣とその上の土塀で仕切られ、本丸に至る間隙は、東の仕切北端と北奥仕切東端との間1.8mである。本丸正面の城門は、大手曲輪から門を通り樹形で東に直角に曲げられて本丸に至るようにしてあり、まさに直撃を防ぐ門の構造がなされている。

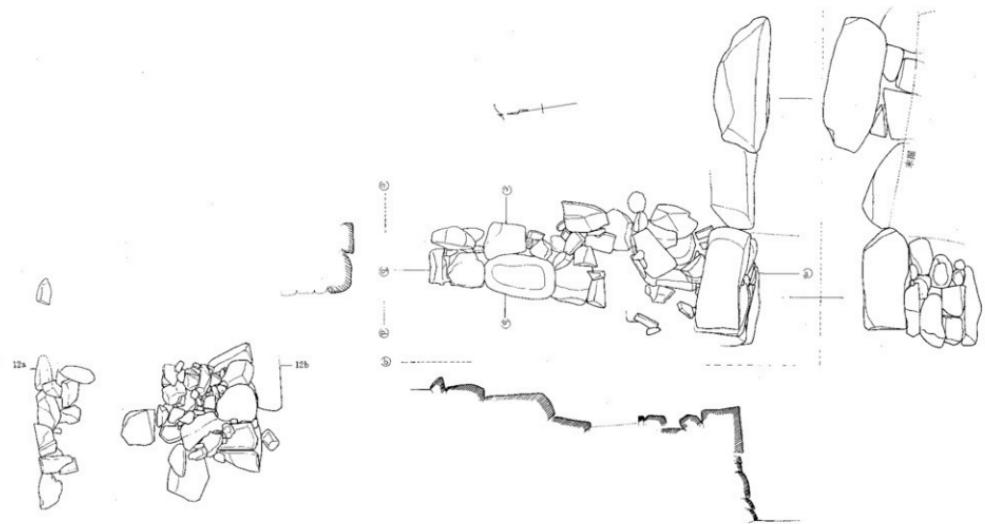
以上が本丸に残存する浮田時代の遺構であるが、浮田時代の本丸の構築は、T<sub>1</sub>系トレンチ断面（第8.9.13.14.15図）の層位からみて前時期～松田氏の城郭の生活面上に土を盛り固め造成したもので、その厚さは20～50cmである。山城の拡張に際し正易な地山削平による拡大によらず、盛土造成によることは山城の改築のあり方として興味のある事実であろう。

#### (2) 松田時代（建武？～永禄11年（1568））

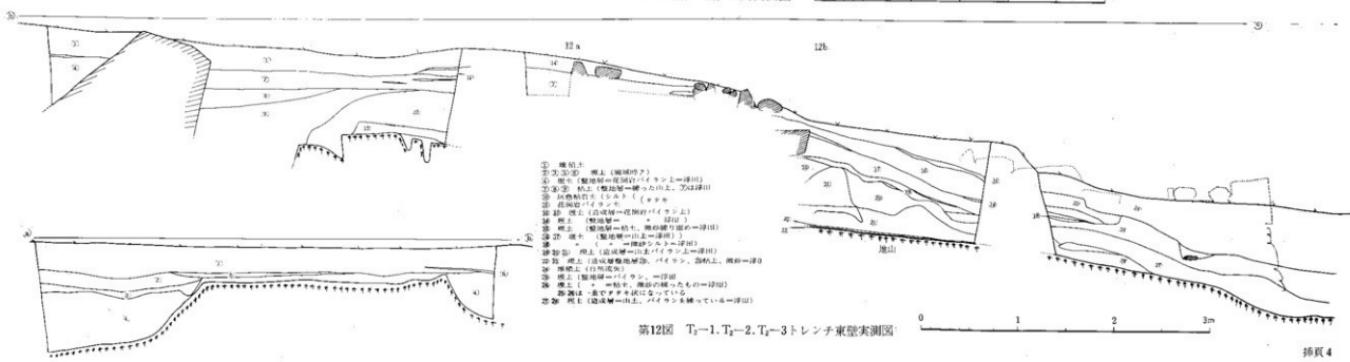
松田時代の遺構は、発掘方法がトレンチ方式であったため浮田時代のように面として検出することは不可能であった。層位的にはT<sub>1</sub>系トレンチ（第8.9.13.14.15図）断面で浮田時代の造成土層下に礎石をともなう生活面の一層が確認された。この層（第2層）は、風化土、焼土、炭、有機質等の堆積が認められる一方、多量の磁器片、カワラケ片、支那鏡、家具有金具、漆幕、種ヶ島銃弾等をともない、層位的、内容的に松田時代に比定される。この層の下にも造成盛土層があり、その下に地山加工層が現われ、本丸の基本的層位関係は上から・浮田層（第1層）一同造成層～松田層（第2層）一同造成層～地山加工層（第3層）である。この第2層、地山加工層との関係は、前者から銃弾が出土していることからみて第2層は鉄砲伝来（にともなう？）以降の改築後のものである。地山加工層上の造成土層は第2層のベースであり第2層にともなうと同時に第3層にのるものであるから、第2、第3層は基本的に断続していないと考えられ、両者とも松田氏の時代の層と断定できる。したがって、前者の時期を松田後期とし、後者の時期を松田前期とした。

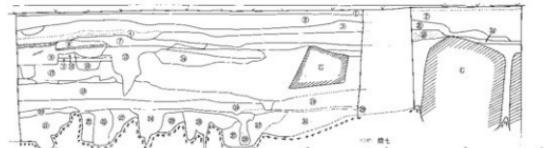
松田後期の礎石（図版第6・第10、14、図）・T<sub>1</sub>-1北・T<sub>1</sub>-1南・T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>・T<sub>1</sub>-Wトレンチで発見され、その大きさは一辺20cm前後、厚さ10cm程の直方体の割石で底部を造成土に埋め込んだものが多いが、浮田時代の礎石とは比較にならないほど小さいものである。T<sub>1</sub>-Wの礎石は「たたき」状に固められた面にともない、この面は本丸北上石垣及びその上の版築にともなう。T<sub>1</sub>-1南、T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>の西で発見された礎石の中心間は、東西、東北両方向とも0.9mであるが、T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>、T<sub>1</sub>-1北、T<sub>1</sub>-Wの礎石は点存で方向、間隔等は確認できなかった。松田後期の礎石は、本丸北部に集中し、特に本丸北上石垣近くに多く一部は石垣にともなっていることが確認された。その距離は約2.5mである。

石垣、掘り切り、版築（第8.9.16図）・本丸北上石垣は、層位的に松田後期層にともなうもの（第16図）東北東→西南西方向に並び現状の長さは約10mであるが、両端は浮田時代に破壊され中央部が浮田造成土中に残存していた。この石垣の積み方は、比較的小さな直方体の割り石、自然割れ石を二、三段に小口積にしたもので、石垣の高さは30～39cm、巾は基底部で85～95cm、上端部で75～90cmである。



第11図、本丸南石垣、城門実測図。 0 1 2 3

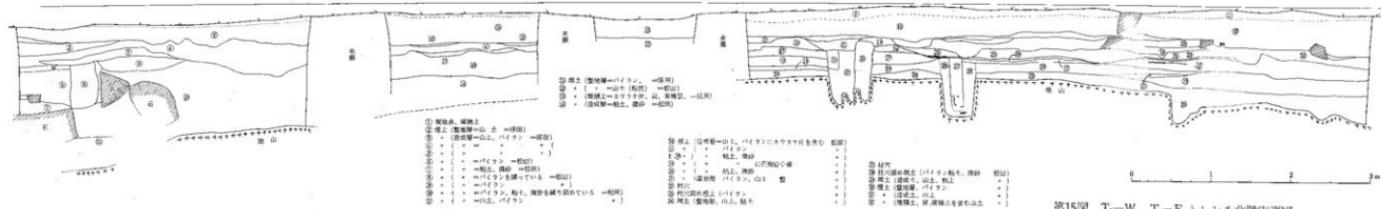




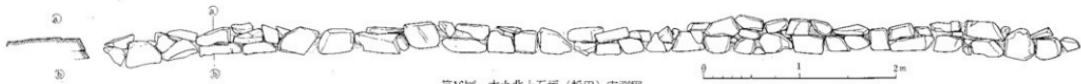
第13図  $T_1-E_2$ ,  $T_1=2$  中トレンチ南壁実測図



第14図  $T_1 = W_1$  トレンチ南壁寒測図



第15図  $T_1-W_3$ ,  $T_1-E_3$  トレンチ北壁実測図



第16圖 李內北上石橋（松田）臺灣圖

cmである。石垣は、地山を30cm程掘り下げその上に山土、花崗岩バイラン、粘土、砂、(石灰)を練り固めて基礎を造り、この上に石垣を築いたもので、石垣上に巾80~90cmの版築が築かれている。版築は、両側に宛板を立てその内に粘土、砂、(石灰)を練り合せた土と、山土、花崗岩バイランを練った土を交互に平らに入れ突き固めたもので上部の基礎と考えられるが、上部はすでに浮田時代の改築で破壊されていた。版築、石垣の内側は、控え積として山土、粘土、砂、(石灰)を練り固めた土で造成され、この土に礎石のともなう「たたき」状の面が続く。石垣の外側は、地山を掘り込んだ掘り切りが設けられ、掘り切りは石垣の地山を約45度の斜面で石垣基底部下約1.4~1.5m掘り下げ、さらに約60度に傾斜を強めて中心部が掘り下げられ、中心部の深さは石垣基底部下3mである。掘り切りの巾は、浮田時代にこの掘り切りを埋めて本丸北下石垣が築かれており、今回の調査では石垣の保存上石垣を抜かなかつたため石垣下の外側の縁は確認できず、完全に計りえない。底部巾は約0.7~0.8m、斜面途中巾(角度の変わる所)は1.6~1.8m、上端部巾は4~5mであると推定され、東ほど巾が狭くなっている。掘り切りは底部の堆積土の状態からみて空掘りであったと考えられる。

松田後期の本丸<sub>北</sub>の北側防備は、掘り切りとその内側縁に低石垣と土塀が築かれ、掘り切り底部と土塀上端との高差は5m前後であったと推定され、この高さは対入防禦に十分機能を果すものである。

本丸南部では松田後期層は確認されたが、遺構等は発見されず、松田後期の城郭建築の中心も北部にあったと推定される。

全体的に松田後期層がのる松田後期造成土層は、浮田時代の造成土のように山土を盛っただけではなく、山土、粘土、砂、花崗岩バイラン、(石灰)を練り固めて造成してあり上層中に水分の抜けた気孔跡と凝結が認められる。一部ではこの練土と山土、バイラン土との互層による造成も認められた。特に平坦部端肩附近の造成土の固めは、地山を切り込んで巨石を芯に据えて練土を練り込めて堅牢にしている(第8、15図)。練土中から点々と焼けたこぶし大の巻き貝(ニシ、サザエ等)が出土し、これは焼いた貝殻をつぶして石灰を取る原料と考えられ、練土に加えてより凝結効果を強め堅固な造成土としたものと推定される、練土によって固められた所は、調査中もツルハシが10cmとは入らない程度堅固で、その耐久性は下手な石垣より堅牢であったと推定される。

本丸の松田後期の防禦施設は、本丸北で発見されただけであるが、基本的にはこれらと同じ防禦施設によって本丸は堅められていたと推定され、すでに半永久的な防禦形態を備えていたと考えられる。

### (3)松田前期

松田後期の改築も、前時期の生活面上に盛土造成したもので、基本的に前時期の遺構は造成上下に残り、造成土下の層=地山加工層(面)が前時期=松田前期と比定され、地山上の遺構が松田前期のものと断定される。 $T_1-E_2 \cdot T_1-E_3 \cdot T_1-W_6$ で地山を掘り込んだ柱穴やピットが確認されたが、礎石類は発見されなかった。柱穴やピットを平面的に具体的な遺構として構成することは、トレチ内的一部で点在的に発見されたにすぎないので不可能であるが、松田前期の城郭建築は、掘立柱や掘立櫓を中心とした構築物で、遺物の出土も後期とは比較にならないほど少量である。全体的に松田前期層

からは日常生活がなされていたことを示す遺物、遺構が発見されず、松田前期の段階ではあくまで中世的な戦闘のための城・詰の城的なものであったと考えられる。しかし、層位的には松田前期は一層であり、この面が年代的に何時まで上るのか、又、松田前期間に於ける改築時期も文献的にも遺物、遺構的にも全く不明である。

#### (4)、本丸北曲輪

現状では採石のため北半分がすでに破壊されているが、全体的に松田層は確認されず、本丸北下石垣に統いて削平加工された地山があり、浮田時代の層は地山上であり前時期の層は改築時に削平されていた。本丸北下石垣北方約3.6mのところに自然堆積土で埋まつた池状の地山の落ち込みが発見され、古図にはないが浮田時代に池状の掘り込みが存在していたことが、確認されたが、規模、機能等は追求しえなかつた。 $T_1-W_4$ で地山上に径25~35cmの柱穴が発見され、層位的には時代を確定しえないが、地山整地以前—松田後期のものではないかと推定される。地山上面にともなう礎石は発見されず、遺物の出土状態も散漫であり、上部構築物が集中してはいなかつたようであるが、北半分が破損しているため本丸北曲輪の詳細は確認しえない。

## 2、大手曲輪

### (1)、浮田時代

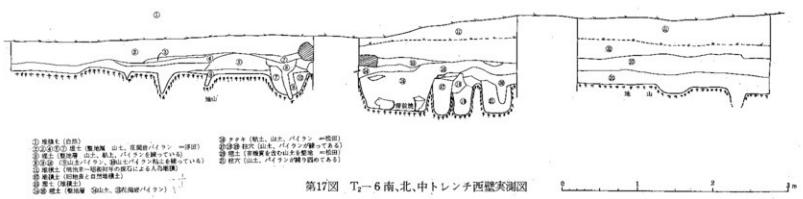
本丸の現状は浮田層上に腐蝕土等自然堆積土が堆積していたにすぎないが、大手曲輪は、昭和初期の西斜面での採石、石切にともなう排土の一部が頂部の大手曲輪に投棄されているため、東南の一部を除いて廃城後の自然堆積土上にさらに入為的な二次的堆積土層が存在している。

大手曲輪で層位的に浮田層・松田後期層が確認できたのは、 $T_2-6$ 中トレンチ(第17、18図)以北で、この部分には本丸と同じく松田後期層上に盛土造成土層があり、この上に浮田層がのっている。大手曲輪南半分の浮田層は、地山を削平して形成され遺構は地山上に存在し、このため松田後期層はすでに浮田時代の改築で消滅し、さらに松田前期層も消滅している。したがつて松田前期から後期への変革は全く検出しえない。

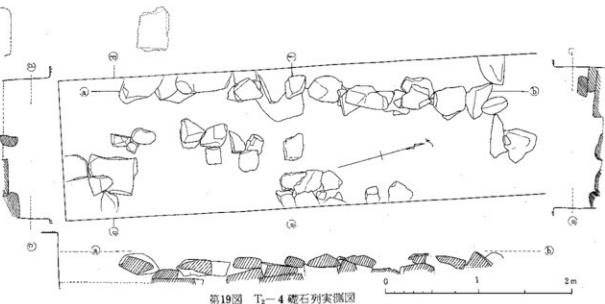
大手曲輪で検出された浮田時代の遺構は、礎石、石墨状列石、地形基礎石積、溝、池、列石状石垣等である。

礎石・礎石が発見されたのは、 $T_2-4$  (第19図)・ $T_2-5$  南・ $T_2-5$  中・ $T_2-4$  西・ $T_2-E_4$ ・ $T_2-W_4$ で、個々の礎石の大きさは本丸のものと同じで一辺約50cm程の直方体の割石であるが、その配列、配置は $T_2-4$ ・ $T_2-5$ 附近の切断、破壊が著しいため調査確認することは不可能であった。 $T_2-4$ で発見された礎石の中心間は1.8m、1m、礎石塚石間は0.9mの間隔で、礎石の一部には大きめの自然割れ石のやや乱れた列石状石積がともなうものもある。この石積は礎石との関係から塗籠壁の基礎部であった可能性もある。

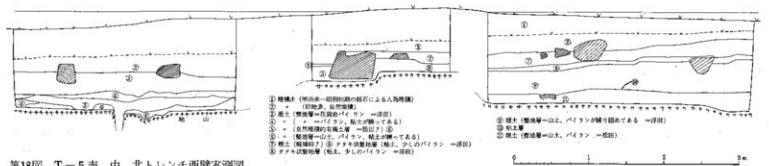
いざれにせよ、大手曲輪で検出された礎石は、本丸南城門近くに集中し、本丸に対する本瓦葺の建



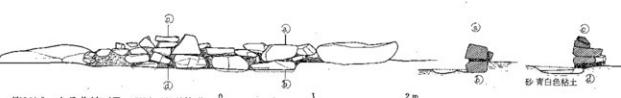
第17図 T<sub>2</sub>-6 南、北、中トレンチ西壁実測図



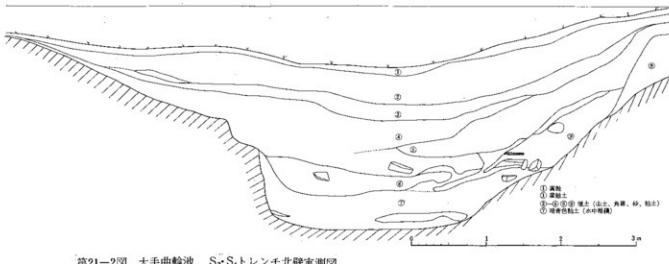
第19図 T<sub>2</sub>-4 磷石列実測図



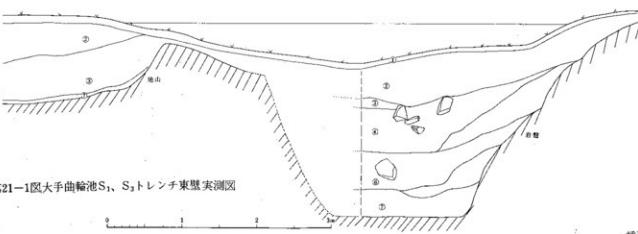
第18図 T<sub>2</sub>-5 南、中、北トレンチ西壁実測図



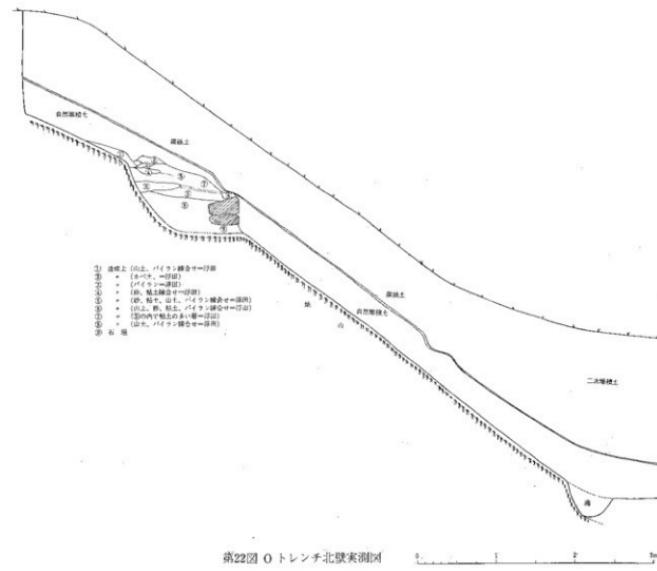
## 第20回 大手曲輪（ $T_2-W_7$ ）地形基礎



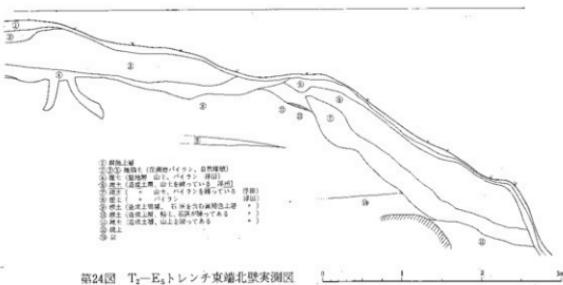
第21-2図 大手曲輪池 S<sub>3</sub>・S<sub>4</sub>トレーナー北壁実測図



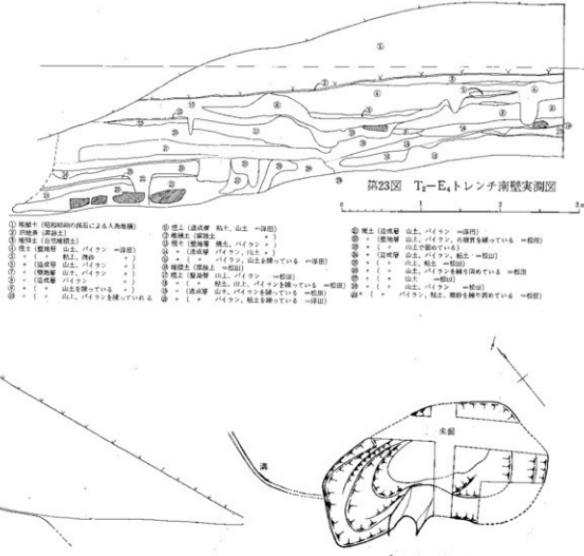
第21-1図 大手曲輪池 S<sub>1</sub>、S<sub>3</sub> トレーニチ東壁実測図



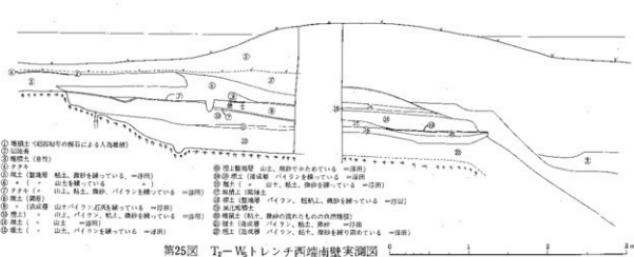
## 第22図 Oトレント北壁実測図



第24図 T<sub>2</sub>-E<sub>5</sub>トレンチ東端北壁実測図



第27回



第25図  $T_2 = W$  トレンチ西端面壁寒測図

遺物が存在していたことを示すが、本丸南城門へ直接繋がる建物ではなかったようである。大手曲輪北部の破壊が著しいためその全容を知ることは不可能である。

石壘状列石（図版第10）・この列石は、T<sub>2</sub>-7北、T<sub>2</sub>-6トレンチ西に位置し他の石垣、事業礎石と異なり長さ1~2m、巾0.6~1m、高さ0.5~0.6mの大きな自然石を地山に形を切って据え付けた單列石で、ほぼ南北方向（磁北より10度東に振る）に東に面を向けて配列され、その南端は直角に西に曲る。列石の東側には20cmの間隔をおいて巾35cm・深さ約30cmの列石と平行な溝が地山に掘られ、この溝は南に延びて大手曲輪南部の池に注ぐ。列石は、東側の一部約8.5mが残存するにすぎず、北側、南側、西側は、過去の採石で完全に破壊されその全容、配列を確認することは不可能であり、どのような構造物であったかは全く不明である。

地形基石（第20図）・T<sub>2</sub>-Wで地形基礎の石積列石が検出されたが、現状は両側の中心的な大きな石とその間の積石が残存するだけで、両側外は過去に破壊されている。現状の長さは4.3m、高さは0.35m、方向は西→東10度南で、列石の外面は北側である。この基礎石積は、地山上に据え付けた大きな基礎石間2.6mに一辺約30cm程の比較的偏平な割石を小口積に地山上に築いたもので、石積の隙間に地山との隙間に山土、粘土、花崗岩バイラン土等を練り合せた土が目的に塗り込めてある。基礎上の構築物としては塗籠の土塀か壁の存在が考えられる。列石の北外側には列石に沿って巾30~50cm、深さ5~10cmの浅い溝が地山に掘られ、この溝は東に延びて石壘状列石東側の溝に合流して池に到る。

溝（図版第9）・前述の石壘状列石、事業基礎の外側に掘られたもので、前者の溝はT<sub>2</sub>-W東端までまっすぐ南下し、後者の溝とここで合流して東に方向を変え池に注ぐ。溝は地山をU字型に掘っただけのもので、円錐を數く等の特別の設備はなされていないが、水の流れた痕跡は砂質青白灰色土の水平堆積で窺え、一時的に水が流れていたようである。

池（第21-1・2、27図）・古図には大手曲輪東南に南北二つの池が存在し、池の跡は第1次調査で確認された。今回の調査では北側の池について発掘をおこなった。この池は、南の二の丸との境に露出している巨岩の縁の岩盤を掘り込んで造られ、若干湾曲した橢円形で長径（東南東→西北西）8.3m 短径（北北東→南南西）4.2m、深さ2.7mである。斜面の角度は、長径東側で35~40度、西側縁部で25~30度、同底部で80度、短径南側で50~70度、北側で60度（推定）で、かなり急傾斜の池である。底部には暗青灰色の水中堆積と考えられる粘土が堆積し、日常この池は水の溜池的なものとして利用されていたと推定される。堆積土中に多くの角礫が投入された層があり、廃城に際し池はある程度意識的に埋められたことを示している。

列石状石垣（第22図）・大手出曲輪と大手曲輪東斜面に設定したOトレンチで斜面上端近く築かれた列石状石垣と、その上部の版築状土層が発見された。この石垣は、大手曲輪平坦部東端から水平約2~3m、垂直約1.5mの所の地山斜面上に、地山を水平に掘り込んで一辺30~40cm、厚さ10~20cmの偏平な割り石を二・三段（35cm程）東（外側）に面を取って小口積に築いたもので、後部の地山との間に控えの固めとして山土、花崗岩バイラン土を練り合せた土で塗り籠んで固めている。この石垣と練り固められた土の上に、山土と花崗岩バイラン土、山土と粘土と砂と小量の花崗岩バイラン土、粘土と砂を練り合せた土が版築状に造成されている。石垣内側の斜面（27度）と平坦部端との間が地山・

のままで、練土による造成がされていないことからみて、石垣と版築状土層は本丸西側や二の丸南側のような土居状斜面を形成するものではなく、土堀板塀等の基礎部分であったと考えられる。石垣の下は、約40度に地山を削って斜面を作成している。大手出曲輪平坦部と石垣底部との比高は3.4m 大手曲輪平坦部端との比高は約5mである。

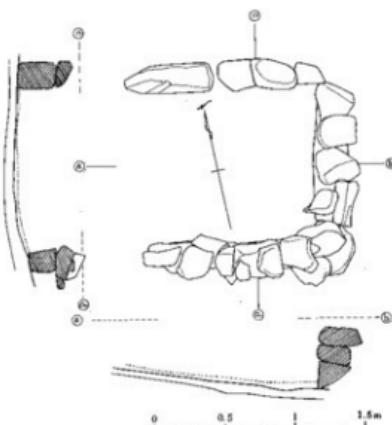
コ字形石組（第26図）・T<sub>2</sub>—E<sub>4</sub>トレーニチ内径東西1.25m、南北1.1mで西側の空いたコ字形石組が発見された。石組は、浮田層上に長めの直方体の割り石を横積にしてコ字形に築き、その上に一・二段や小さな割り石を積み並べたもので、全体は内側に面を取つて積まれ、高さは40cmである。石組

内部は、底面が少し窪んでいるが遺構的なものは全く検出されず、大小の自然角礫が乱雑に投げ込まれた状態で詰っていた。規模からみて上部に構築物を築くには小さく、又、基礎のような堅固な築き方でなく石を並べただけのようなもので、上部に構築物を築くことは不可能である。この石組が何の遺構であるか目下のところ判断しがたい。

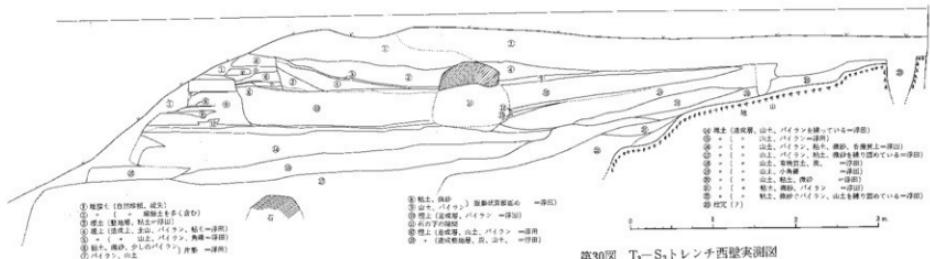
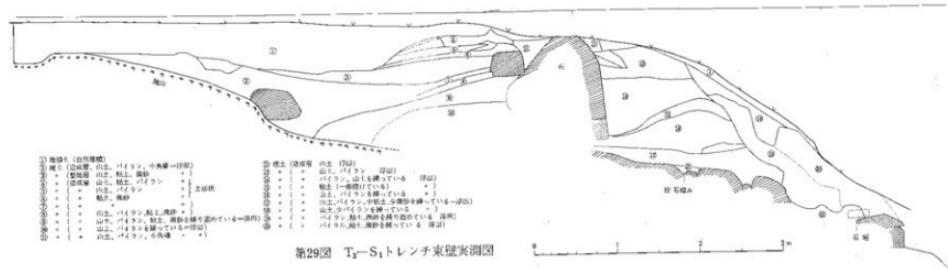
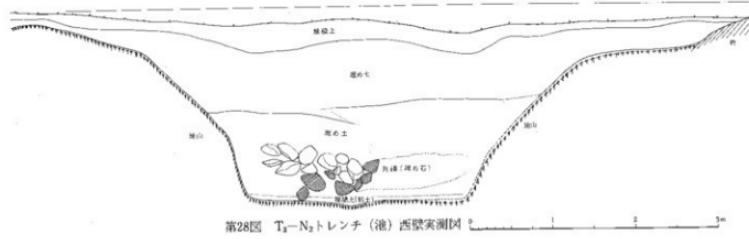
全体的に浮田時代の大手曲輪の構築は、本丸の様に石垣が築かれず、平坦部端や斜面を山土、粘土、砂、花崗岩バイラン土（石灰）等を練り合せた造成土で固め、人工的な防禦斜面を造成したものであることが各トレーニチによって確認された（第24・25図）。

## （2）、松田時代

大手曲輪で浮田造土層下に松田後期層が確認されたのはT<sub>2</sub>—4～T<sub>2</sub>—6中トレーニチ・T<sub>2</sub>—E<sub>4</sub>トレーニチ（第17, 18, 23図）で、T<sub>2</sub>—4～T<sub>2</sub>—6中では、地山上の薄い造成土層に礎石が存在し、又、地山を掘り込んだ掘立埋込み柱跡やビットが発見された。礎石は本丸と同じく小さな平らな割り石で一辺20cm程、厚さ5～10cm程である。礎石や柱穴は、トレーニチ内だけの検出のためその方向、配列、間隔等の平面的様相を確認することができなかった。大手曲輪には松田後期造成土層がほとんどなく、松田後期の生活面は地山上に形成され、この時点での松田前期の生活面や遺構は消滅したと考えられる。T<sub>2</sub>—E<sub>4</sub>では複雑な浮田造成土層下に松田後期層、同造土層が確認され、その造成土層は山土、粘土、花崗岩バイラン土等を練り固めたもので東端に割り石や焼土が含まれている。T<sub>2</sub>—E<sub>4</sub>の松田後期造成土層は、曲輪平坦部を造成するために多量に投人されているがそれは一時に多量の土を入れて造成し



第26図コ字形石組



たものではなく、ブロック的に互層的に種々の練り合わせた土を重ねてより堅牢化をはかるて造成したものである。

### (3) 大手出曲輪

第1次調査により古図に表わされている大手出曲輪が、大手曲輪東斜面下東側に残存することが確認されていたが、ここも多量の二次的堆積土によって埋められ、当時の生活面は現地表下2mのところで確認された。大手出曲輪は、大手曲輪東斜面途中に造成土により巾3m（長さは両端が破壊されているため不明）の平坦部が築かれたもので、大手曲輪東斜面とは巾約50cm、深さ約30cmの溝で区切られている。出曲輪平坦部の築き方は、内側1.5mが平らに整地され、その東（外）側巾約1mが10cm程高くなればゆるやかに下って東斜面に続く、出曲輪平坦部には土塀、板塀、柵等の防備構築物の存在が十分考えられるが、造成面以外にそれらの基礎的なものは確認できず、又、柱穴、柱跡も発見されなかった。あるいは、内側の平坦部の外の一段高くなった所が、土居的なものの基礎のなごりかも知れない。

## 3. 二の丸

### (1) 浮田時代

二の丸は、現在の矢坂山山頂にあり大手曲輪との境堀部や東部には巨岩が露出し、又、一部には地山も露出し、薄い自然堆積土直下は地山で、浮田時代の生活面は地山上に形成されていることが確認された。したがって、松田後期以前の層位や遺構は基本的には残存せず、浮田時代の改造で消滅したことを示している。二の丸は、他の部分と比較すると人為的破壊はほとんど受けず、プランの保存状態は良好であるが、山頂であり花崗岩土であることも相俟って土砂の流失が他より激しく、自然破壊が著しい。現状で礎石と認められるものは二の丸内に数個しかなく、それも大半が遊離している。瓦片などの出土からみて二の丸内にも本瓦葺の建築物が存在していたと考えられ、当然礎石も存在していたことは明らかであろうが、人為的抜取りや自然転落により喪失したものと推定される。T<sub>3</sub>系トレンチでも礎石等は発見されず、又、地山を切り込んで礎石を据え付けた痕跡も確認されず、二の丸の上部構築物がどのようなものであったかは不明である。二の丸内で発見された遺構は、池と南斜面の石垣・造成斜面及びその上の板塀、二の丸と二の丸東腰曲輪の石垣程度であり、二の丸平坦部から遺構は検出されなかった。しかし、瓦片、磁器片、備前焼片等の出土からみて当然二の丸にも生活に供される構築物があったことが推定される。

池（第29図）・T<sub>3</sub>-N<sub>6</sub>トレンチで古図の二の丸北手に現わされている池が発見された。池は、大手曲輪との堀にある巨岩塊の地山を掘り込んだもので、巾約8m、深さ約2mで、そと掘り込みは外側から15度、45度75度の三段の傾斜をもつて掘られている。底部には水中堆積の青白灰色粘土層があり、この池も日常溜池とされていたようであるが、日常の水を貯めには池の規模は小さすぎる。粘

土層には多量の角礫が投げ込まれた状態で堆積し、廃城時にこの池も意識的に埋められたことを示している。

石垣（図版第14、第29、30図）・二の丸南斜面は、平坦部端の列石と斜面上の低い石垣が二重に築かれている。石垣は、現状では一部破損転落し点在的であるが、本質的には連続して南斜面に築かれたもので、基本的に石垣と上の列石とが組み合って二の丸の平坦部端及び斜面を堅牢にし、同時に防禦をも堅めるものである。この上下の石列、石垣の組み合せは、基本的に本丸西斜面の上下の石垣と同じ機能のもので、平坦部南端の防禦施設基礎としての列石と下の石垣及びその間の斜面が、土居状斜面を形成する。

二の丸平坦部南端の土居状斜面の構築は、緩やかに下る地山を削って平坦部の基礎の控えとなる巨石を据えつけ、その前後を土、粘土、砂、花崗岩バイラン土、(石灰)を練り合せた土で練り固め、その上に山土を入れて平坦部端内側を造成する。平坦部端は練土の互層で固め、その上に基礎的列石を築き、その前後をも練土で固めると同時に、地山斜面上を削平し土居状斜面の下の基礎となる石垣を2~3mの巾で築く。石垣と列石及び基礎の控えの巨石との間に練り土、粘土を互層状に入れて固める一方、この間に斜面に造成する。列石内側に練り土、花崗岩バイラン土の互層による版築の一部が存在し、列石上に土壠が築かれていたと考えられる。 $T_3-S_3$ では列石・石垣は発見されなかつたが、石垣はトレチ下2~3mの斜面にあり、列石は代用の練り土による基礎が築かれ、その上に版築が築かれている。斜面の角度は34~40度で、下の石垣底部と上の列石上端との比高は2.4~2.5m（東部は3~5m）あり、列石上の土壠の存在を考えると二の丸南の土居状斜面は十分に対人防禦の機能をも果たすものであったと考えられる。（第31図）

二の丸南側面の土居状斜面は、土居の外側半分の形をもって平坦部端の肩部を固めたもので、大手曲輪、二の丸東腰曲輪との境以外の二の丸平坦部端は土居状斜面の造成によって全て固められている。

## (2)、二の丸東腰曲輪

二の丸と東腰曲輪との境は、露出する岩を切って高さ1.1mの崖を造成している。崖の上部に粘土、砂の練り土が残存していることからみて崖の上には土壠が築かれていたと考えられる。古図には東腰曲輪は一段に描かれているが、 $T_3-6$ 中央で低い列石が確認され、東腰曲輪は上下二段に分けて造成されていたことが発見された。上段と二の丸の比高は1.5m、上段と下段との比高は約1mで、上段の巾は約7mで、巾2mの平坦部が上段にはあるが、下段は約10度の斜面である（東側が採石で破壊されているため東端の状態は不明）。上段、下段とも地山の整地は認められたが、遺構は検出できなかつた。しかし、土釜等の生活用具の出土からみてこの曲輪にも上部構築物の存在は十分考えられる。曲輪の東側が破壊されているためこの曲輪の防禦構築は確認しえない。

# 4、上部構築物

## (1)、浮田時代

本丸、大手曲輪で発見された礎石、地形基礎や、検出された軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、稚児棟鳥食瓦等からみて浮田時代には、本瓦葺の入母屋造りの建築物を中心とした永久建築が城郭の要所に建築され、一部には塗籠の建築物も存在していたことも十二分に考えられる。建築物の具体的な配置、規模、構造は、破壊や礎石の喪失で十分に確認できず、重層か単層かもはっきりしないが、本丸の礎石は重層にも十分耐えうるものである。

本丸は、周囲を石垣及び造成土居状斜面とその上部に築かれた土堀で堅め、南側の石垣中央に樹形を備えた城門を構えて大手筋を堅め、多分に近世的城郭様相を呈すものであったと考えられる。本丸北部の礎石列からみて、南側、東側に1m（間中）の巾で柱が内外に並ぶ（北、西は未確認であるが同様であった可能性が大きく、周囲がそうであったと推定される）、東西約12m（6間強）、南北約11m（5.5間強）の中心的建築物が本丸北部に存在していたと考えられる。踏石状石敷や礎石塚の延長部分が東南に存在することからみて、東南角に何らかの入口が存在していたと考えられ、礎石の二重配列からみて重層であった可能性も多分にあるであろう。城門の建築物は不明であるが、樹形の版築、仕切りの地形基礎的石積、礎石、えたき状整地面などの組合せは、本瓦葺の一部塗籠をともなう建築物の存在を推定させる。

大手曲輪本丸より一部塗籠壁をもつ本瓦葺の建築物が存在していることは、礎石の状態からみて明らかであろうが、規模、様相は不明である。大手曲輪の他の地形基礎や列石は、それ自体が一部だけ残存するのであるからそれにともなう建築物はまったく不明であるが、それらの存在は大手曲輪の要所々々にも永久建築物が存在していたことを示す。大手曲輪の周囲の堅めは、基本的に斜面と土堀組合せであったと考えられ、石垣は確認されなかった。大手曲輪東側に大手の城門が存在していたことは古図からみても明らかであるが、城門の遺構は全く確認されなかった。しかし、大手曲輪との北高や大手曲輪東側の入り込みからみて、大手の通路は大手曲輪に入り込んだ急傾斜な道であったと考えられ、城門は廊下門、櫓門的なぐぐり門的な門構が存在していたのではないかと推定される。

二の丸では礎石が遊離、転落、喪失しているため建築物の配置、規模、構造等を確認することができなかったが、瓦片<sup>じがふ 片</sup>や磁器等が検出されたことからみて、二の丸にも本瓦葺の永久建築が要所に存在し、日常生活がなされていたと考えられる。

大手曲輪と二の丸で小さな池が発見されたが、これらの容量で城内の必要水量を支えることは不可能で、水の手は、南の丸南下谷の大成池や、東西山腹の湧水個所が利用されたらしく城外に存在していた。

以上から見て、浮田時代の富山城は、城郭各曲輪に永久建築が建てられ、周囲を土堀で堅められ、城内に常住して日常生活が営まれていた多分に近世的な様相、内容を示す城郭であったと考えられる。

## (2)、松田時代

本丸北部の松田後期層の礎石・石垣・版築等の遺構や、明磁器片、家具調度品留金具、漆幕、カワラケ、瓦等の遺物が検出され、松田時代後期の富山城にはすでに本瓦葺の建築物が存在し、

城内で平時にも常住して日常生活が営まれていた（当然政治も）ことをこれらの遺構、遺物は示している。特に多量の明磁器片中茶器が多く含まれることや、家具等の留飾金具、同漆幕等の非軍事的日常生活用品の大量出土は、この山城がもはや戦闘のためだけのものでなく日常の生活の場として平時にも存在意義があり、平時の生活に使用されて、近世的城郭の様相、内容の一部をすでに備えていたことをも示している。

松田後期の本丸は、北部を掘り切りで断ちその内側に低い石垣とその上に土堀を築いて防禦を堅め、周囲をもこの石垣と土堀及び造成斜面で堅められていたと推定される。本丸北部には土堀、たたき状整地面、本瓦葺の建築物が一体化して築かれているが、礎石の規模から見て建築物は単層のようである。本丸外にも本瓦葺の建築物が存在していたことは礎石と瓦の検出で明らかであろうが、一方掘立埋込柱による建築物も存在していたことが確認され、全てが本瓦葺の建築物でなく、あるいは草葺、板葺等の建築物も存在していたことも考えられる。

松田時代前期は、基本的には掘立埋込柱による建築物で、堀も掘立か打込みの柵や板柵であったと推定され瓦葺の建築物は存在しなかったようである。城の様相は、多分に中世的な戦闘機能だけの山城で、日常生活の場は蓋の館にあり戦時に立籠もある詰城的な城郭であったと考えられる。

## 5、年代について

本丸の層位関係は、自然堆積土層—生活面層（第1層）—（第1）造成土層—生活面層（第2層）—（第2）造成土層—地山加工層（第3層）である。第1層を浮田時代に比定することについては、関ヶ原合戦後浮田氏に代って富山城をもつた小早川氏はすぐに廢城とし<sup>⑨</sup>小早川氏の改築使用は考えられず、最後の使用者は浮田氏であるから動かしえない。したがって第1層ののる第1造成土層は浮田氏の改築であることは明らかである。第2層を松田後期に比定したが、可能性としては浮田時代に二度の改築があり、浮田時代を二期に分けうる。しかし、松田氏が本拠地金川で浮田氏の宗家宇喜多氏に亡ぼされ、永禄11年（1568）に浮田忠家が富山城に入城したが、浮田氏の改築は、宗家の居城岡山城の改造増築や城下の整備工事等との関連からみて入城後の改築以外は考えられない。宇喜多氏は、天正元年（1573）に岡山城（石山に所在）に入城し、同時に城郭の大改築と城下の整備をおこない、さらに天正6年（1578）頃さらに城下町の整備をおこなう。天正18年（1590）から岡山城大改造がなされ、現在の岡山城本丸等が築かれ、慶長2年（1597）に天守閣が完成して岡山城の大改造が終了する。岡山城の衛中にに対する備えの出城である富山城が、岡山城の改築と同じ時期に大改築がされたとは戦略的にも考えられず、さらに天正年間に於ける宇喜多氏の戦闘状態、後半の羽柴秀吉の軍事行動への参加等の宗家の動きとの関連からも天正年間に於ける大改築の可能性は稀である。また、浮田氏は備前及び周辺が宇喜多氏の平定のもとに平定になると南山麓の野殿に根小屋を移し平時の居館としたと伝えられ<sup>⑩</sup>。1590年代の富山城大改築は考えがたい。いずれにせよ富山城の浮田時代の改築は、発掘結果からみてもまさに大改築であり、出城の城主の採配だけでなく当然宗家の援助がなくては不可能である。浮田時代の富山城は、時間的にも軍事的政治的にも大改築が二度もおこなえる状勢には

なく、二度の改造は不可能であったと考えられる。したがって浮田時代に於ける大改革は、宗家の岡山移住以前の岡山平野に於ける押えと備中への備えとして戦略的にも重要な意義をもっていた入手時に、宗家の援助のもとになされただけであるとみるべきである。

以上の考えから第2層以下は松田時代に比定されるが、第2層中出土の銃弾、第3層の存在、松田氏の富山城使用期間等から、第3層も松田時代に比定され、第2造成土層による改革を境にそれ以後（以上）を後期に、前（下）を前期に分類した。松田後期の改革は、第2層中の銃弾からみて、一面に鉄砲伝来による戦闘様式の変化の影響をも受けているものであろう。岡山に於ける種ヶ島銃の普及の上限は、文献史料で確実に押えられていないが、軍記物の中で信憑性の高いものに記載された鉄砲使用年代や、鉄砲に関する記載のある文献等の推定年代から1550年代と推定される。したがって、松田後期の改革もその頃であったと考えられるから、前述の松田後記の富山城の城郭様相、内容の上限は1550年代であり、少なくとも1560年代初頭にはすでに近世的城郭要素をもつ城郭であったと考えられる。

松田前期の時期については、遺物等の資料が不充分であり、文献史料も不備のため何時の時期の構築かは不明であるが、少なくとも松田氏が富山氏より入手した時期のものではないようである。また、富山氏の造構は全く検出することができなかった。

富山城は1570年代初頭に天守閣こそ存在しないが非常に近世城郭の要素、形態を備えたものであり、1550年代か1560年代の初頭にはすでに近世的城郭の要素、形態、内容をもつ城郭であった。

（出 宮 勤 商）

註 ① 永山卯三郎編「戦国時代の城砦」岡山市史、1936年による

② 註① 1729頁

③ 「富山城跡第1次調査報告」10頁岡山市教育委員会、1968、名称は仮称

④ 戦国時代の編前を平定した宇喜多直家を宗家とし、彼の子弟で分家し家臣化した一族を浮田姓で表わし、一般的に分けて使用される。

⑤ 註③12頁

⑥ 註⑤

⑦ 大類伸、鳥羽正雄著「日本城郭史」565頁、雄山閣1960年

⑧ 松田後期の本丸の位置は不明であるが、造構からみて浮田時代の本丸と同じ場所であったと推定される

⑨ 註②

⑩ 註③3頁

#### 参考資料

岡山市史

吉備群書集成

岡山県通史

## 第四章 遺物

今回の発掘調査で多量の遺物が層位的に各トレンチで発見されたが、そのおもなものを時代別に記すと次のとおりである。

### 1. 浮田時代

全体的に浮田時代層から瓦片、備前焼片、カワラケ、燈明皿、磁器片、釘、武具等多量の遺物が出土した。遺物の出土状況は、全体に平均的に出土するが、本丸北石垣南側、東側、大手曲輪池などで集中的に出土し、特にその内には一括投棄した状態の所も認められた。出土物に貴重品、完形の日常用器が少ないとや出土状況から、浮田時代の居館の移動、廃城の移築移転でかなりの城郭の物品、用材、生活用品等も運び出されているのではないかと推定される。

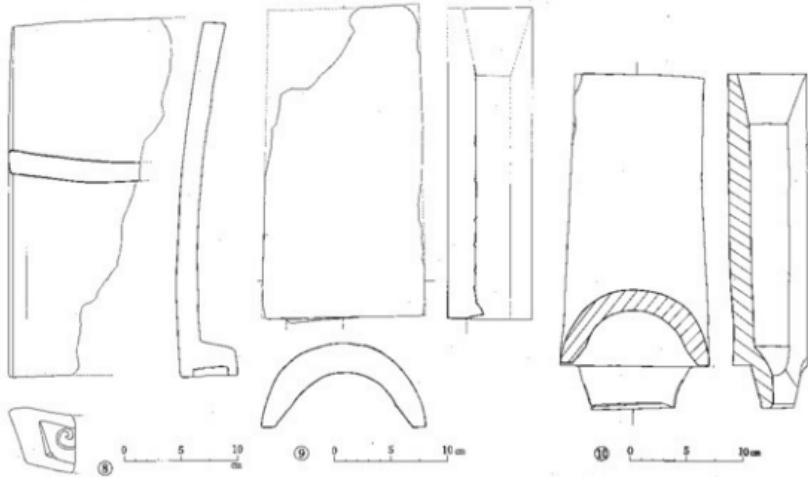
#### (1). 瓦 (第32図)

軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、稚児棟鳥食瓦の5種類の瓦が検出されたが、完形品は存在しなかった。基本的に丸瓦は内側に細かい布目がありその上に擦状痕のあるものもあり、外部は滑らかに整形されている。平瓦は両面整形であるが、上面に細かな布目の残るものもある。丸瓦、平瓦とも焼成は焼きが良く固く縮ったものや、焼が悪くもどり気味のものなどまちまちである。丸瓦の寸法は、長さ30cm(縫ぎ重ね部4cm)、巾13.2~11.5cm、厚さ2cmと、長さ31.5cm(推定、縫ぎ重ね部破損)、巾14.3cm~13.5cm、厚さ2.5cmの二種類がある。平瓦は、巾26cm、厚さ2cm、長さ破損不明で表側上端が2cm程削られている。軒平瓦は長さ31.5cm、厚さ1.8cm、巾不明で、その文様は凸線で縁取った内区に擬宝珠と唐草文様の二種があり、外区は素文線である。唐草文様は、中央に宝珠を描き単茎のものと宝珠がなく複茎のものとの二種が確認された。軒平瓦の正面は擬宝珠が4.6cm、唐草文様が5cmである。軒丸瓦は、全て巴文様であるがが二つ巴と三つ巴の二種がある。二つ巴の瓦は、径13.2cm外縁巾2cmで、内区外周に珠文帯がめぐりその内に巴が配され、前面の厚さは外縁部で2~2.3cmと薄い。全体的に造りは小形で焼成もあり良くない。二つ巴の巴には水中動物の手足を表現したような小さなどび出しがあり、巴自体が水中動物を表現しているのかも知れない。三つ巴瓦は、大小二種類検出され、小さい方は前面径13cm、外縁巾2cmで内区の外周に珠文帯がめぐり、中央に巴が配されている。大きい方は前面径16cm(復原)、外縁巾2cmで、内区の外周に凸線による縁取があり、その内に珠文帯がめぐり中央に巴がある。稚児棟鳥食瓦は、前面径18cm(復原)、外縁上部巾5cm、同下部巾2.5cmで、内区の外周に凸線の二重の縁取りがありその内に珠文帯がめぐり、さらにその内に凸線の縁取りがあつて中央に巴がある。

以上の瓦を含めて比較的多く瓦が出土した地点は、本丸北石垣列東部、同南部、城門附近、T<sub>2</sub>-4トレンチ、T<sub>3</sub>-E<sub>6</sub>トレンチ、大手曲輪池内、T<sub>3</sub>-1、T<sub>3</sub>-6トレンチであった。。今回の発掘調査の瓦の出土状況の概数は、本丸で石炭箱3箱、大手曲輪で同1.5箱、同池内同1箱、二の丸同1箱であり、丸瓦、平瓦片が圧倒的に多かった。

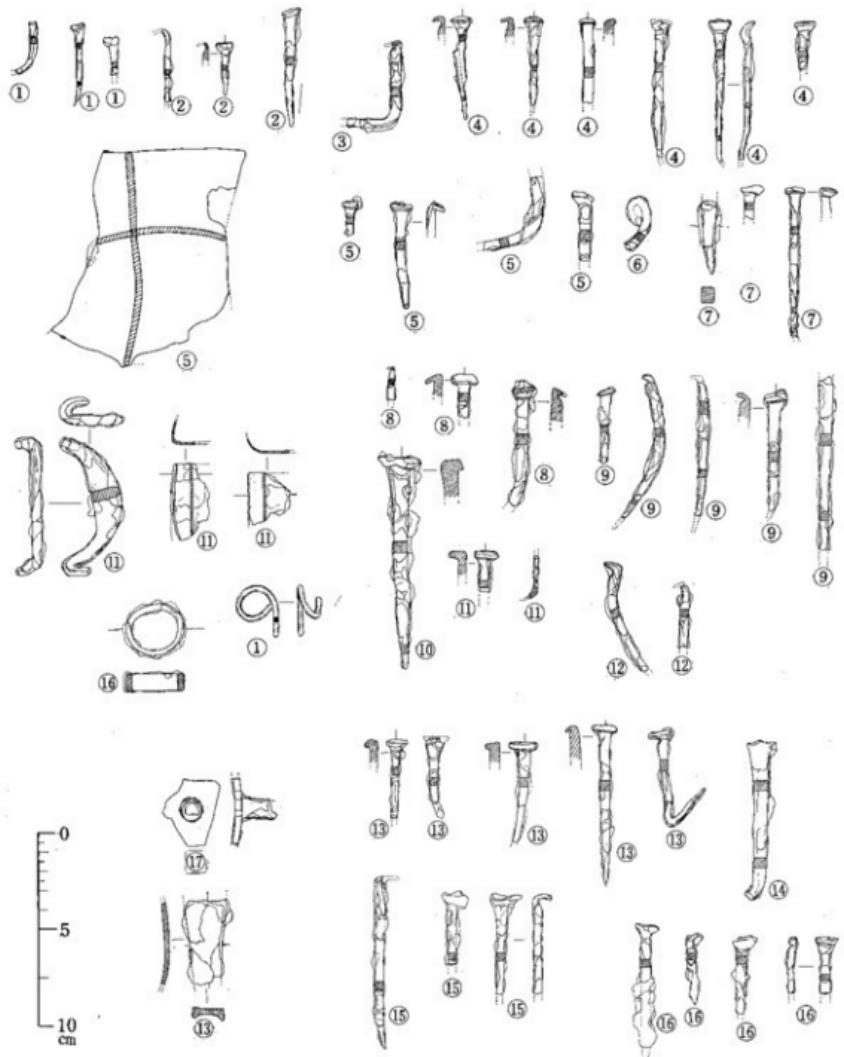


①~⑦ 拆半縮尺



第32図、瓦拓本、実測図（浮田時代）

- ① 軒丸瓦 (T<sub>2</sub>-E<sub>5</sub>)
- ② 軒丸瓦 (本丸)
- ③ 稚児棟鳥食瓦
- ④ 軒平瓦 (大手池)
- ⑤ 軒平瓦 (T<sub>1</sub>-2南)
- ⑥, ⑦ 軒丸瓦 (T<sub>1</sub>-E<sub>4</sub>)
- ⑧ 軒平瓦 (T<sub>1</sub>-E<sub>4</sub>)
- ⑨, ⑩ 丸瓦 (大手、池)



第33図、鉄釘、鉄片実測図一浮出

- ① T<sub>1</sub>-2 南
- ② T<sub>1</sub>-E<sub>4</sub>
- ③ T<sub>1</sub>-E<sub>5</sub>
- ④ T<sub>1</sub>-W<sub>6</sub>
- ⑤ T<sub>2</sub>-O
- ⑥ T<sub>2</sub>-W<sub>6</sub>
- ⑦ T<sub>2</sub>-W<sub>6</sub>
- ⑧ T<sub>2</sub>-4
- ⑨ T<sub>2</sub>-W<sub>6</sub>
- ⑩ T<sub>2</sub>-5
- ⑪ T<sub>2</sub>-7西
- ⑫ T<sub>2</sub>-W<sub>6</sub>
- ⑬ T<sub>2</sub>-N<sub>1</sub>
- ⑭ T<sub>2</sub>-N<sub>2</sub>
- ⑮ T<sub>2</sub>-6
- ⑯ T<sub>2</sub>-S<sub>2</sub>
- ⑰ T<sub>2</sub>-3

### (2) 鉄釘 (第33図)

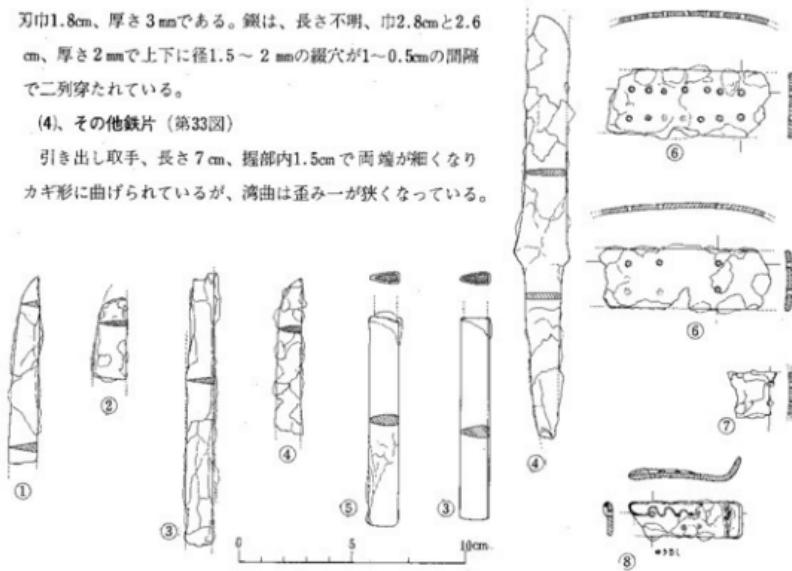
鉄釘の出土状態は各トレンチとも同じく点在的であったが、本丸では比較的に集中的であり、本丸北壁石列東、南から多く出土した。これらの釘は、花崗岩土中に存在していたため特に鉄分の凝結が激しく鏽ぶくれが著しく原形を止めるものが稀少であった。釘の内には明らかにテコの力で抜かれた曲り方を示すものもあった。釘は全て折曲頭の角打釘で、検出された釘を区分すると、全長11cm径6×7mm、全長不明径6mm角、全長8.3cm 5mm角、全長9cm 5mm角、全長8cm 4mm角、全長2.8cm 3mm角、全長不明2mm角等に分けられるが、6mm角、5mm角、4mm角、3mm角、2mm角に大別される。釘は太さに比例して長くなるようであるが、計測できるものはわずかであった。全体的に鉄釘の総概数は200~300片であるが、各部所の特徴は検出しえなかった。

### (3) 武具 (第34図)

武具と確認された遺物は全体的に少数で、出土状況は極めて散漫であり、特に第1層においては銃弾は検出されなかった。確実に武具と確認できたものは、小柄刀4、同柄2、小刀状鉄器1、鐵片3である。小柄の刃渡りは完形品がないので不明であるが、約13cm前後であると推定され、刃巾は1.2~1.5cm、厚さ3~4mmである。小柄柄は長さ8.9cmと9.2cm、巾1.3cm、厚さ5mmである。小刀状鉄器は、刃渡り不明、刃巾1.8cm、厚さ3mmである。鍔は、長さ不明、巾2.8cmと2.6cm、厚さ2mmで上下に径1.5~2mmの鍔穴が1~0.5cmの間隔で二列穿たれている。

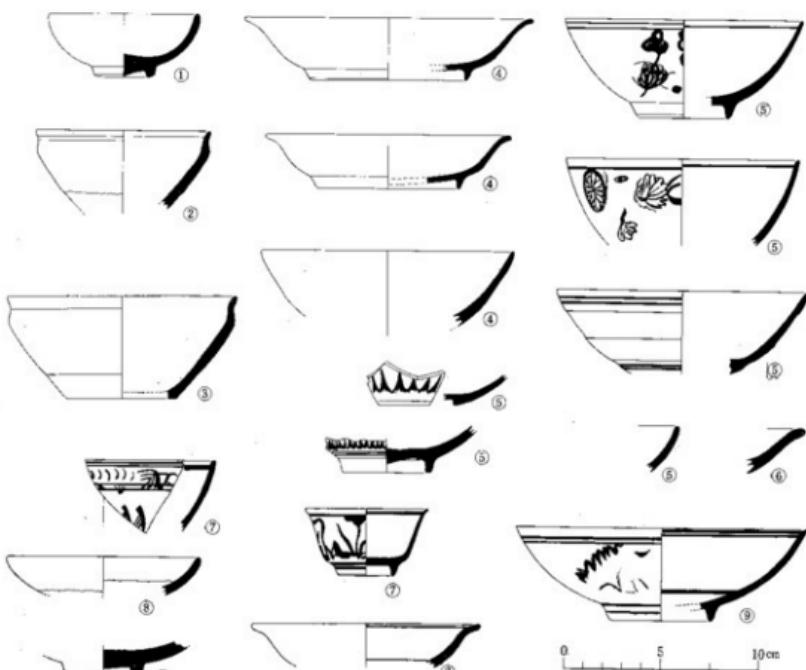
### (4) その他鉄片 (第33図)

引き出し取手、長さ7cm、握手部内1.5cmで両端が細くなりカギ形に曲げられているが、湾曲は歪み一が狭くなっている。



第34図 武具実測図 (浮田時代)

- ① Tr-E<sub>5</sub> ② Tr-E<sub>2</sub> ③ T<sub>2</sub>-5 ④ T<sub>2</sub>-6 ⑤ Tr-W<sub>6</sub> ⑥ Tr-1 ⑦ T<sub>2</sub>-W  
⑧ Tr-2 南



第35図、磁器片実測図（浮田時代）

- ① T<sub>r</sub>-3、白磁
- ② T<sub>i</sub>-2、天目
- ③ T<sub>r</sub>-W<sub>6</sub>、天目
- ④ 大手曲輪、白磁
- ⑤ 同 染付
- ⑥ 同 青磁
- ⑦ 二の丸染付
- ⑧ 同 白磁
- ⑨ T<sub>i</sub>-1 染付

鉄板、厚さ3mmでわずかに湾曲するが、破片であるため不明。

鉄輪、径2.6~3cmの楕円形で厚さ3mm、巾9mmの鉄輪で、木材の柄等に巻き締て使用されたものらしい。

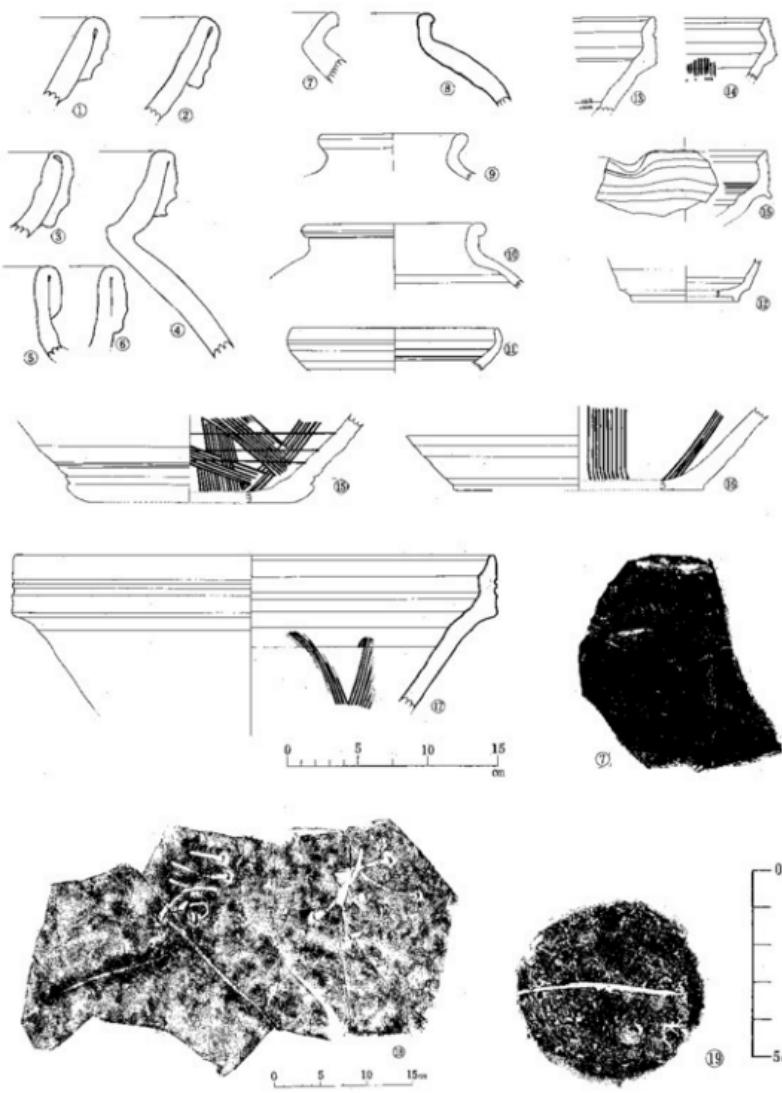
突起付鉄片、厚さ3mmの湾曲する鉄片に径1cmの円柱状の突起がついているものであるが破片であるため何の一部であるかは不明。

針金状鉄片、径3mmの鉄線で螺旋状に巻いたもの一部である。

その他鉄片、破片であるため不明である。

#### (5) 磁 器（第35図）

磁器類の出土状況は、全体に平均して散在的に出土し、特に出土地点に特徴はなかったが、本丸の礎石列の東と南の一部に比較的集中して出土し、出土物は全て破片である。全体の出土量は約150片程度であるが、全体的な出土は、本丸、大手曲輪、二の丸の順であった。出土した磁器片は、染付、青磁、白磁、天目、鉄絵等で、大半が明国製と認められるが、鉄絵や白磁、染付等の一部には李朝朝鮮製のものと認められるものも存在した。銘の存在するものは染付茶碗と白磁皿でいずれも染付によるが、判読できるのは茶碗二つで、それは宣徳年造と大明年造である。磁器の器形は、茶器、碗、皿等で、



第36図、冀前油実測図

- ① 同Tr-W ② 同Tr-5 ③ 同Tr-6 ④ 同Tr-6 ⑤ 同T<sub>1</sub>-W<sub>4</sub> ⑥ 同T<sub>1</sub>-N<sub>1</sub> ⑦ 同Tr-W<sub>2</sub>
- ⑧ 同Tr-W<sub>2</sub> ⑨ 同Tr-W<sub>1</sub> ⑩ 同Tr-S<sub>3</sub> ⑪ 瓶Tr-W<sub>1</sub> ⑫ 同Tr-S<sub>2</sub> ⑬ 摺Tr-S<sub>3</sub> ⑭ 同Tr-W<sub>6</sub>
- ⑮ 同Tr-6 ⑯ 同Tr-5 ⑰ 同Tr-W<sub>1</sub> ⑱ 同Tr-N<sub>1</sub> ⑲ 雜口油小壹底部 T<sub>1</sub>-W<sub>1</sub>

茶器は径6.3cm、高さ3.5cmの染付小茶碗と径9cm、11.8cmの二種の天目茶碗が認められた。碗は、最大が径15cm、最小が7.8cmで染付のものが多く、皿は径14.8~10.4cmで白磁のものが多い。青磁はいわゆる井鉢状のものである。染付の文様は、全体的に草木を描写したものやその抽象化したものが多いが、一部風景の描かれたものも存在した。

#### (6) 備前焼 (第36図)

備前焼片の出土状態は、全体的に投棄された状態のものが多く、特に本丸北部、同礎石、大手曲輪池内から多量に出土した。又、T<sub>3</sub>-N<sub>1</sub>で二石入の鉢のある壺の一箇体が潰れた状態で出土し(図版第15)、内に麦の茎の一部が存在していたが、造構はともなわなかった。出土した備前焼片の器形は、壺、甕、油小壺、皿、碗、摺鉢等が確認されたが、全体的に壺、次いで摺鉢が多く壺は少なかった。

甕は平均的に全体から出土し、甕の口縁部は外側に折り返し反転して作られ中心に折り目の残っているものが多く、その外面に2~3条の浅く巾広い凹線が付けられ、この下はほぼ直角に切られている。口縁部は外にゆるやかに開き、頸部でくびれて肩部に到る。

壺は、口縁部が外に反転した玉縁で凹線ではなく、断面が橢円形を呈し、ほぼ垂直に立つものや少し外に開くものが多い。一部玉縁でないものも検出された。口径(復原)は、35cm、23.6cm、13.2cm、10.6cm等であった。

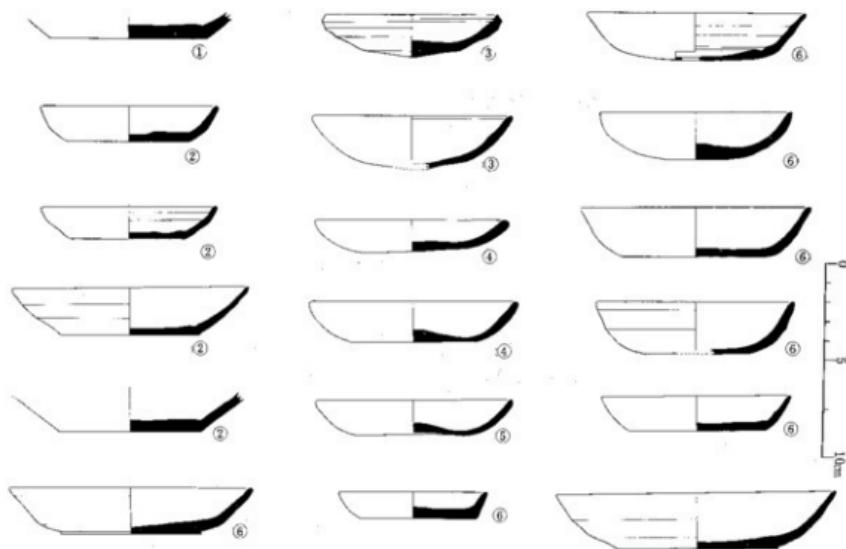
摺鉢は、小破片のため復原推定できるものが少ないが口縁部下に沈線を有するものと、ゆるやかな凸凹で下端を外に張り出すものと二種類ある。復原できるものの口径は34.6cmである。内部の摺目は、口縁部下と内斜面との間に3、4本の水平沈線を入れその下に摺目を入れる(下部破損で摺目の方向不明)ものと、口縁部下内斜面上端から縦に9~10本単位の沈線を入れたもの、左右交互に斜線を入れたもの、角度の異なる斜沈線と水平沈線を交錯させたもの等である。一部には磨滅の著しいものがあり長時間の使用を示している。

浮田層出土の備前焼甕口縁部と松田後期層のそれを比較してみると、前者の外面には2~3条の浅く巾広い凹線があるが、後者の外面は無文で長橢円の断面を示す。

備前焼片の出土量は全体で石炭箱約2箱であった。

#### (7) カワラケ (第37図)

素焼の浅皿でいわゆる燈明皿的なもので、全体から出土したが特に本丸から多く出土し、なかでも礎石列東側と南側に集中して存在していた。完形品は5個で、あとは破片である。カワラケの出土状態は点在、集中を問わず、投棄された状態のものが多く造構にともなうものはなかった。カワラケの作り、焼成には僅差があり、ロクロを使用せず全面窯仕上のものと、ロクロ使用全面窯仕上で糸切痕のあるものとに大別される。口径は、6.7~7.6cm、9.2~12.5cm、14.5~15.6cmに大別できるが、9.2~12.5cmのものが多くなかも口径10cmのものが特に多かった。カワラケのなかには底部に孔を開けたものがあり、燈明台か、燐台に使用されたと考えられるものも存在した。しかし、カワラケの出土量からみて全てがそれらに使用されたのではなく、大半は日常用器の皿として使用されていたと推定される。出土量は、本丸北部で半箱(果実用平箱)1箱、同南部で約500~600片、大手曲輪200~300片、二の丸100~200片である。



第37図、カワラケ実測図(浮出時代)

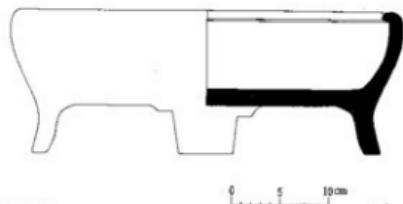
① T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>北 ② T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>東 ③ T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub> ④ T<sub>2</sub>-W<sub>6</sub> ⑤ T<sub>2</sub>-5 ⑥ T<sub>1</sub>-W<sub>2</sub>・T<sub>2</sub>-W<sub>1</sub>、の間



第38図、支那銭拓本

#### (8)、支那銭 (第38図)

支那銭の出土状態は散在的に点々と出土し、集中的な出土や遺構にともなう出土は認められなかった。



第39図 手あぶり

第40図 風炉状土製品

出土した支那銭は、開元通宝2、天聖元宝1、明道元宝1、熙寧元宝1、元豐通宝2、焼錢2の計9枚で、判別できるものは全て北宋銭でありこれらはいずれもこれまで各地の古銭出土跡地で多量に検出されているものである。浮田層から出土した古銭は全て支那銭（銅）で、天正通宝等戰国末期の日本銭（銀）は検出されず、この時期の通貨の主体がまだ海外銭にあったことを示している。



第41図 鉄皿

#### (9) その他の

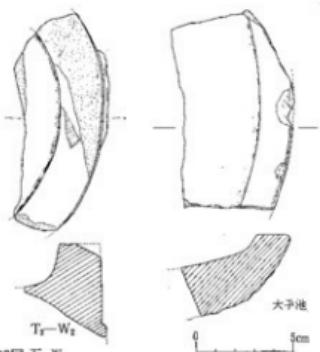
手あぶり（第39図）、瓦器製の四脚付盤状の手あぶりの破片がT1-2南で発見され、この復原したものは室町時代の職人絵図の中に描かれている手あぶりに酷似している。口径16cm、最大市径16.8cm、高さ14.8cm、内深8.1cmである。外縁に研磨整形が認められる。

風炉状土製品（第40図）、瓦焼的な素焼の焼物で、底部と脚の一部の破片であるが復原すると三脚になり、底部外径23.6cm、同内径18cm、脚高4.1cm、全高、内深、全様は不明。外全面は研磨整形が施されているが、内部（底部）は不整形である。復元推定すると器形は茶道具の風炉と考えられる。

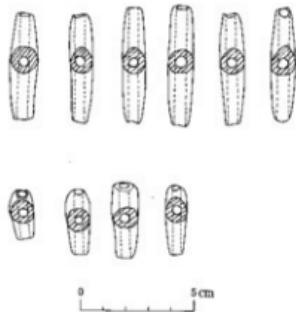
鉄皿（第41図）鉄物製の浅い円形の皿状鉄器で約 $\frac{1}{2}$ の破片である。復原内径17.6cm、外径21cm、深さ1.8cm、厚さ0.7~0.8cmで直径両端にU字形の突帯がつけられている。皿ではなく反転して蓋状ものである可能性もある。風炉状土製品と鉄皿は、本丸列石東踏石状敷石東の遺物集中地点で出土。

石皿（第42図）T1-W2と池内で砂岩製石皿破片が発見された。前者は内径14.8cm、外縁巾1.8cmで内側、縁、外側とも研磨され、破損部分からみて底部は水平で、置いて使用するようになっていたと推定される。後者は、内径29cm、外縁1.7cmで内側、縁は研磨されているが外面から底部は半球状にのみで細かく削られている。

砥石、T2-7西で発見され、砂岩のいびつ六角形で全面研磨痕があるが両端は破損。巾5cm、厚さ4.5cm、長さ8.3cm



第42図 石皿



第43図 土鉢

である。

土釜鉢破片（第45図）・T<sub>3</sub>-6で検出。須恵器的な焼成で薄手の作りである。内部に条痕が認められるが原形は不明。

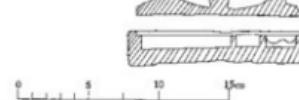
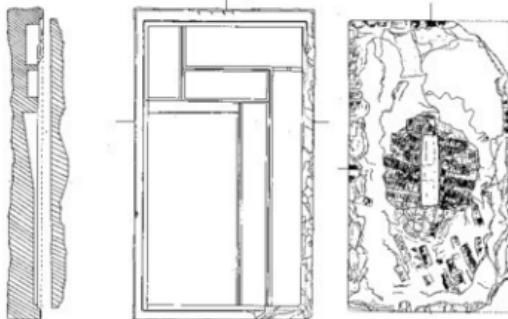
土鍾（第43図）・T<sub>3</sub>-N<sub>3</sub>の池中より出土。長さ2.2~5.2cm、径1cm前後の管状のもので形は全て不整形である。池中より約100個出土。

硯（第44図）・昭和10年頃T<sub>2</sub>-5西石壘状列石内側の表土下20~30cmのところで採石作業中に一文銭の束とともに発見されたものでその時に一部破損した。材質は粘板岩製で、身は、横13.7cm×縦22.2cm×高さ2.5cmで、内部が筆置き

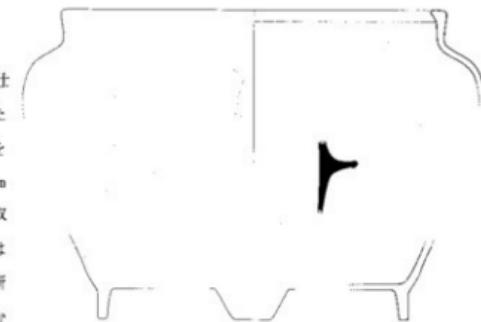
墨置き、朱墨置き、墨、朱墨割部等6区に仕切られ、いずれものみで切ったあとを磨いたものである。外部ものみで形を造ったあとを磨いたものでのみ痕を残す。蓋は、横11.5cm×縦19.7cm、高さ0.5~1cmで、表中央に取手がのみ影で浮彫にしてある。表面の整形は打欠きとのみ削りである。裏面は全面平に研磨され、上部中央に「上」の字をのみで刻む

土鍋（?）（第46図）・T<sub>3</sub>-6で出土。

須恵器質の焼成で薄手の作りで、内部は条痕、外部は研磨整形が認められ、底部に四つの脚を持つ。一部に煮沸痕が認められる。



第44図、硯



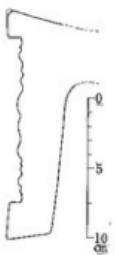
第45図、土釜鉢、土鐘?

## 2、松田時代

本丸及び大手曲輪の北部に存在する松田後期層から瓦破片、磁器片、備前焼破片、カワラケ、鉄釘、家具留金具、漆幕、銃弾、支那錢等多量の遺物が出土した。出土状況は、圧倒的に本丸北部に多く、特にT<sub>1</sub>-2中、南、T<sub>1</sub>-E<sub>6</sub>、T<sub>1</sub>-W<sub>6</sub>に著しく、これらのトレンチには部分的に遺物が集中する所がある。これら的一部にはピット内や、ピット上部に遺物が集中して存在する所が認められた。



第46図、瓦拓本（松田後期）



遺物の出土状態で注目されるのは、建築材の瓦や鉄釘は勿論、日常生活用器の磁器片、カワラケが武具より圧倒的に多く出土したこと、松田後期の城郭の内容、あり方を知る重要な資料である。

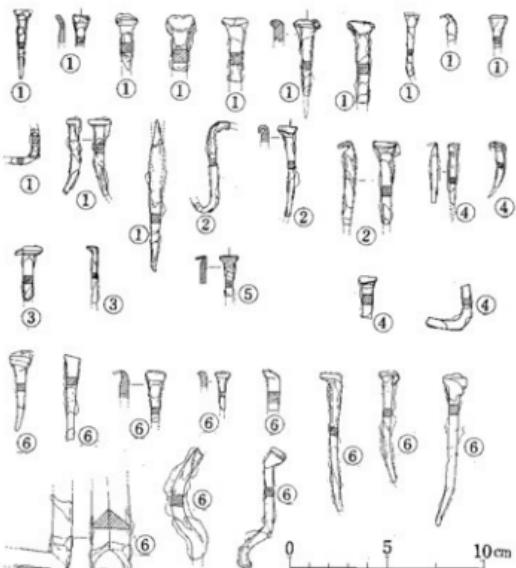
松田前期層上からの遺物出土は少なく、T<sub>1</sub>-E<sub>4</sub>でピット内よりカワラケ片が出土した程度であった。

#### (1)、瓦（第46図）

T<sub>1</sub>-Wトレンチ東南角で一ヶ所に瓦片が集中して発見され、出土した瓦には完形品は存在しなかったが軒丸瓦と平瓦の二種類が確認された。平瓦は破片のため原形は不明であるが、表裏両面とも整形され外面に細かい布目の残存するものと布目が完全に消されているものがある。軒丸瓦は、三つ巴文様で径16.5cm、厚さ2.2~3.2cmで、外縁が素文で内区の外周に凸線の縁取りがあり、この内に珠文帯がめぐらし、その内にまた凸線の縁取りがあり、中央に三つ巴がある。瓦の焼成は平均的に良いものが多く、出土状態は松田後期層のたき状平面の浅く掘り込まれたピット内に一括集中して存在し、あるいは投棄された可能性が強い。又、本丸北の掘り切り底部附近にも点在的であるが平瓦破片の出土が認められた。全体の瓦出土量は石炭箱約36箱であった。

#### (2)、鉄釘（第47図）

鉄釘の出土状況は、松田後期層全体から散在的に出土したが、T<sub>1</sub>系



第47図、鉄釘、鉄片等実測図（松田後期）



- ① T<sub>1</sub>-2中
- ② T<sub>1</sub>-2南
- ③ T<sub>1</sub>-2
- ④ T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>
- ⑤ T<sub>1</sub>-W<sub>2</sub>
- ⑥ T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>

トレンチからは比較的多く出土した。出土状態は、点在的で集中的な出土が認められなかったが、數本の固まった状態での出土が所々で認められた。

釘の保存状態は花崗岩土中に存在していたため悪く鏽ぶくれが著しいが、全て折曲頭の角打釘である。検出された釘は、全長8cm5mm角、全長5cm5mm角、全長3.8cm4mm角、長さ不明3mm角等の測定値が得られ、全体的に8mm角、6mm角、5mm角、4mm角、3mm角に大別できる。長さもこの太さに比例すると考えられるが確認できる釘は残存していない。松田後期の釘は、細長いものが少なく長いものは多いものが多い。全体での釘の出土概数は約100片前後であるが、出土地点の特徴は確認できなかった。

(3) その他の鉄片 (第47図)

鍔状鉄片、断面二等辺三角形を呈し、直角より少し鋸角に曲る角部が出土したが、はたして鍔の一部であるかどうかは不明。

下げ手、T<sub>1</sub>-2中で出土。半円形に湾曲した鉄製の鍋等の下げる手で巾30cm、高さ17.5cm約3kgを負ぐ。

鉄板片、厚さ3mmの鉄板片であるが、小片であるため原形不明。

(4) 銃弾 (図版 第24)

松田後期層出土遺物中武具と確認されたものは、銃弾だけでT<sub>1</sub>-2南トレンチで三個発見された。

銃弾は鉛製で径約1.1cmであるが、内一つは偏平に押圧されていた。又、銃弾の形をしていないが、鉛小塊が点々と出土し、これは銃弾の原材と考えられる。

(5) 家具留金具 (第48図)

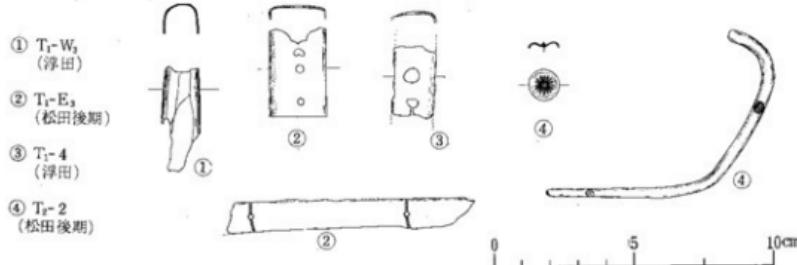
T<sub>1</sub>-2南、T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>で散在的に出土し、全て金銅製品である。

釘頭状留金具、円形で径1.1cm、厚さ0.5mmで中心に釘頭部があり、中心部の瘤みには放射条の細線の文様が認められるが、菊状の文様であるかどうかは保存状態が悪く不明。

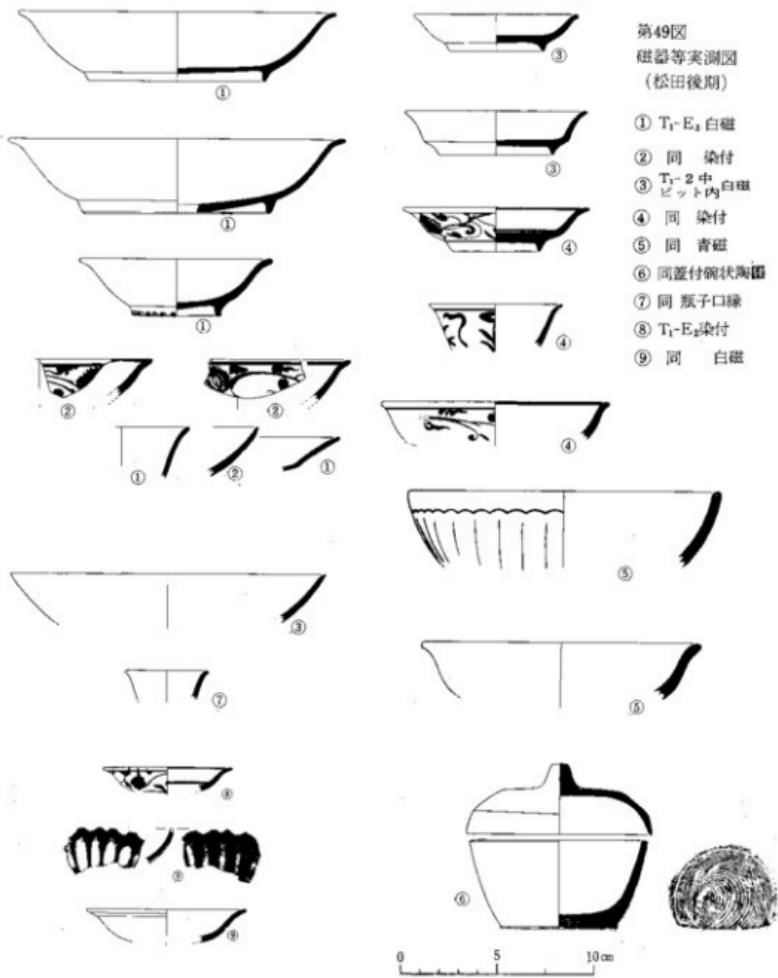
角金具、長さ3.1cm、巾2cm、厚さ1mmで一端が格子座面状に装飾加工され両側は内に折り曲げあり、中心線上に三つの釘穴が穿たれ、その一つはハート形である。

縁金具、現長約8cm、巾1.1cm、厚さ0.8mmで巾は少し湾曲し、5.5cmの間隔で二つの釘穴が穿たれている。

この他に変形コ字状の鋼線が出土しているが何であるか不明。



第48図、家具留金具実測図 (浮田、松田後期)



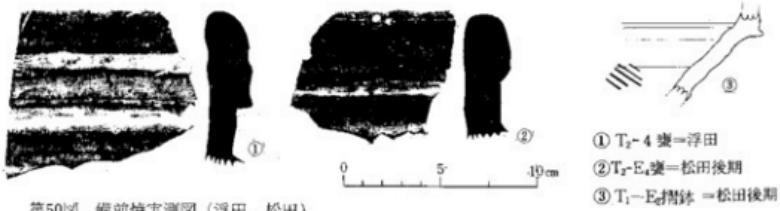
第49図  
磁器等実測図  
(松田後期)

- ① T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub> 磁
- ② 同 染付
- ③ T<sub>1</sub>-2 中 ピット内 白磁
- ④ 同 染付
- ⑤ 同 青磁
- ⑥ 同蓋付碗状陶器
- ⑦ 同 瓶子口縁
- ⑧ T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>染付
- ⑨ 同 白磁

節金具や角金具の文様、装飾加工の仕方や附近から点々と漆幕が出土していることからみて、これらは調度用品的な家具の節り金具であったと考えられる。

#### (6)、磁器、(第49図)

磁器類の出土状況は、T<sub>1</sub>-2 中、南、T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>、T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>に集中的に出土する所があり、他の所からも散在し、出土物は全て破片である。T<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>では染付とカワラケが共存し、T<sub>1</sub>-2 中北端ではピット内に染付、白磁、青磁、明錢、備前焼、カワラケ等が集中して出土した。全体で出土した磁器は、



第50図、備前焼実測図（浮田、松田）

染付、白磁、青磁等で、大部分が明国製と認められたが、一部には李朝朝鮮製と認められるものも存在した。白磁皿と白磁破片の底部に染付で銘を入れたものが発見されたが、多分に記号化しているため判読できない。出土物の器形は、茶碗、碗、皿等で、全体的に茶碗、小皿、小碗は染付が多く、皿は白磁、碗は青磁が多い。茶碗は小茶碗で浮田時代のものとほぼ同じ大きさで、皿は径19.4~18.4cm、9.4~10cmの大小二種に、碗は径14.6~16.3cm（青磁）と12cm前後（染付）に大別される。染付の文様は全体に草木を表現したものが多い。磁器片の全体での出土量は約250片で白磁、染付が圧倒的に多い。

#### (7)、備前焼（第50図）

備前焼の出土はあまり多くなく、点々と壺、甕、搗鉢等の破片が出土したが、口縁部は甕の破片が一つ発見されただけである。この口縁は、折り返し反転は認められず外面には文様がなく梢円状の断面を呈す。搗鉢の標目は、斜沈線で浮田時代のものに比べて各沈線の間隔が広く約3mmであるが、破片のため全体の標目の様相は不明。

#### (8)、カワラケ（第51図）

カワラケの出土状況は、点在的な出土地点と一ヶ所に集中的な出土地点に大別され、全体的に本丸北部が出土地の中心である。完形品は3個であとは破片である。 $T_1-E_3$ ではカワラケ破片が一括集中投棄された状態で多量に出土し、同トレンチ内でこの出土状態が三ヶ所で検出され、これらのカワラケ片には二次的な火を受けたものが多く含まれている。カワラケの作りや焼成は個々に個差が認められ、整形は籠仕上によるがロクロを使用し糸切痕の認められるものと、ロクロを使用していないものとに大別される。大きさは、口径6~6.5cm、9.2~10.7cm、14~15cmの小、中、大に分類され、全体的な出土は中のもののが多かった。カワラケの器形は細分すると約6種類に分類できるが、浮田時代のものにも同一形式のものが多く層位的にこれらを時期区分することは不可能である。全体の出土量は、 $T_1-2$ 中で約350片、 $T_1-2$ 南で約60片、 $T_1-E_4$ で約100片、 $T_1-E_3$ で石炭箱1箱であり、特に $T_1-E_3$ に集中をみた。

#### (9)、支那銭（第38図）

支那銭の出土状況は、本丸北部を中心とし、数枚以上の集中出土は認められなかった。出土した支那銭は、開通元宝4、淳化元宝1、祥符元宝1、天聖元宝2、景祐元宝1、皇宋通宝4、嘉祐元宝2、熙寧元宝2、元豐通宝2、元祐通宝2（以上北宋銭）、淳熙元宝1（南宋銭）、永樂通宝1（明銭）、焼銭3、不明1の計26枚で、判読できるものはいずれもこれまで各地の古銭出土遺跡

で多く検出されているものである<sup>①</sup>。出土銭は全て銅銭（一文銭）である。

#### 10、その他（第49図）

蓋付碗状陶器、瓦器的でよくない焼成の陶器製の小容器で、口径9.3cm、高さ4.6cmの身に中央に取手のついた口径9.7cmの蓋がつく。底部にロクロ使用の糸切痕が認められる。

漆幕、朱色の漆幕だけが点々と出土したが全くの破片であり、その漆器がなにであったかは不明であるが、家具か食器のものではないであろうか。

貝殻、造成土中に点々と焼かれた巻き貝の混入が検出され、これは食用より石灰原料であったと考えられる。

瓶子、口縁部と底部が1辺づ出土。

以上が浮田時代、松田時代出土遺物の概要であるが、この外に用途不明の小破片（鉄器が多い）や、陶磁器の細片が多数出土している。これらはほとんどが原形の一部のみが残存するもので原形復原推定もおこないがたいものである。

#### 富山城古図について

今回の調査中、香川県三豊郡詫間町に住む富山城家臣の子孫の富山氏より富山城跡の古図を保有している旨の連絡があった。現地に赴き調査した結果、家伝によれば富山氏はもと湯浅姓を名乗る紀伊国の住人で戦国時代に松田氏に仕官し、富山城に詰めていた。松田氏滅亡後は姓を富山と変え浮田氏に仕え家臣とし富山城に居たが、関ヶ原の合戦後浮田氏が亡ると高松に移り土着したことである。家伝の信憑性や、富山城主浮田詮家（後の坂崎出羽守）の関ヶ原合戦前後の動向などからみてその記載を全て信用しがたいが、この富山氏が松田氏に仕え、さらに浮田氏にも仕えたのは事実であろう。このことは松田氏の家臣團の構造を考える一資料ではあるまい。家伝にいうように湯浅氏が紀伊國から備前へ来て松田氏に仕官し、富山城へ詰めたのが事実であれば、松田氏に於ける名主層等地方武士との家臣團関係、さらに松田氏の岡山平野の出城である富山城の性格、名主層<sup>②</sup>等地方武士層と関連を示す一資料とはなりえないであろうか。

しかし、松田時代の湯浅姓は、松田家玉松城家臣録<sup>③</sup>にみあたらず、又、富山姓は宇喜多家分限帳の富山城主浮田左京亮<sup>④</sup>の条にもみられず、史料的に富山氏の家伝の信憑性は全く不明である。

一方、富山家に伝わる富山城古図は、基本的には吉備群書集成第1巻掲載の富山城古図と同一であるが、吉備群書集成のものは各曲輪の規模が縦×横の間数で表わされているのに対し当家のものは全て坪数で表わされている。おそらく、いづれも写本で、富山城古図の原本が存在していたのではないかろうか。富山家の古図は、その表現方法、表現内容からみて江戸時代中頃のものではないかと推定されるが、基本的には富山城の縦張りをよく伝え、大手備えや、當時また土居が残存していたことを示すなど富山城の構造の一部を知ることができる貴重な資料である。

（出 宮 德 尚）

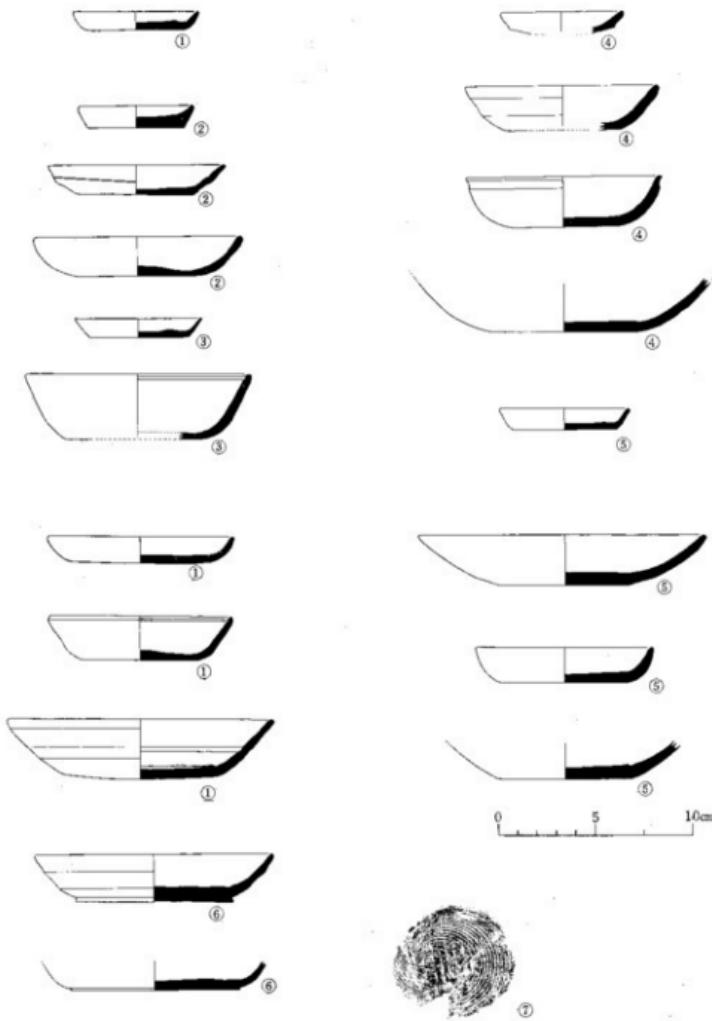
註 ① 「日本出土銭貨一覧」日本考古学辞典、東京堂 1962年

② 「医説日本庶民生活史」第3巻、9、207頁、河出書房新社 1961年

③ 註①

④ 「藤原朝臣松田家備前金川駿龍山玉松城家臣録」岡山市史第1324頁、1936年

⑤ 「浮田家分限帳」、統群書類從



第51図、カワラケ（松田後期）

- ① T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub>
- ② T<sub>1</sub>-2 南
- ③ T<sub>1</sub>-E<sub>4</sub>
- ④ T<sub>1</sub>-2 中 ピット内
- ⑤ T<sub>1</sub>-2 中
- ⑥ T<sub>1</sub>-E<sub>3</sub> ピット内
- ⑦ 亲切度

## 第五章 結語

富山城跡の所在する矢坂山一帯は、大正年代以来採石地となり、特にこの山から良質の花崗岩「みかけ石」を産出することからみかけ石の特産地として各所で採石がおこなわれて来た。さらに近年の開発、宅地造成ブームによる石材、埋土の需要の増大にともない採石が一段と拡張増進されたと共に大量の採土も山全体でおこなわれ、一部山の変形をきたしつつある。城跡も昭和10年頃以降の採石で破壊を受け、特に戦後採土も加わりその破損は近時著しく、昨年の第1次調査で城郭各部の破損が確認された。

今回の第2次調査は、昨年の第1次調査の結果に基づいて破壊に傾している城跡各部の発掘をおこない、遺構の残存状況を把握するとともに戦国城郭の内容、性格、様相を明らかにし、富山城跡のもつ歴史的、城郭史的意義の解明に資すると同時に今後の保存対策の資料を得ることを主としたものである。今回の調査方法はトレーニング方式であったため城郭の基本的構造や形態については明らかにしえたが、城郭建築物の配置や規模等の個々の具体的構造物の検出はおこないえなかった。これらの検出については今後の各層別の全面発掘を待たねばならない。

いずれにせよ、今回の発掘調査の結果が富山城の資料としてだけでなく、中世城郭と、近世城郭の研究、さらに岡山の戦国時代の研究に若干でも資するところがあれば幸である。

### 1. 富山城の歴史的意義

#### (1) 浮田時代

浮田時代の富山城は、永久建築で堅められ城内で日常生活、政治がなされていた城郭で、多くに近世城郭の要素を備えた城郭であったことが確認され、その中心時期が永禄11年（1568）から天正年間（1580年代）にあったと推定される。永禄・元亀年間の浮田氏の宗家・宇喜多氏の居城・龜山城（上道郡沼）は、現状で礎石、石垣等が確認されず、瓦の出土も認められず、古図からみても近世の城郭が存在していたとは考えがたく、多くに居館的な城郭であったと推定される。したがって富山城は、岡山城（宇喜多氏居城以後）に先行する岡山平野に於ける初現的な近世的城郭であったと考えられる。永禄末年から天正初年の富山城は、出城として戦略的に重要な意義をもつとともに、宇喜多氏の備前平定と近世的支配体制の確立という歴史的動向の中で近世的城郭としての存在意義があったのであろう。永禄11年（1568）に松田氏が宇喜多氏に亡ぼされ、松田氏の出城であった富山城は、宇喜多氏の出城として岡山平野の国人層に対する強力な前衛基地となり、宇喜多氏の国人層の解体、家臣化に重要な役割を果たした。岡山平野の国人層の居城（館）は、永禄から元亀初年に宇喜多氏によりほとんど攻略破棄されるが、必ずしもこれにより国人層が解体し、近世的家臣團に組込まれたとは考えがたい。宇喜多氏の岡山進出一岡山平野の本拠地化が松田氏滅亡後5年もの期間を必要としたことや、宇喜多氏の領地が早く実施されたといわれる備前南部で文禄年間に実施されていることなどからみて国人層の解体と宇喜多氏の蔵入地の拡大が必ずしも容易でなかったことを示している。この意味で国人

層解体の軍事拠点としての富山城が、宇喜多氏の近世化の一担い手とし、又一拠点として近世的城郭の要素、内容を備えた城郭として出現したのではなかろうか。同時に、それ故に宇喜多氏の近世化の達成とともにもう居城・岡山城の近世化の完成にともないその存在価値の低下という宿命をもった富山城は、その出現時から近世城郭へ転化しえない限界を自らもち、近世的城郭のまま終ったのではないであろうか。

## (2)、松田時代

室町時代初期から永禄11年（1568）まで富山城は、金川（御津郡金川）の守護代的存在であった松田氏の岡山平野に於ける（直轄的）出城であったが、今回の調査結果鉄砲伝来以降本瓦葺の建築物と土塁、石垣等で堅められ日常生活、政治が平常域内でおこなわれていた近世的城郭の要素、内様を備えた山城であったことが確認された。

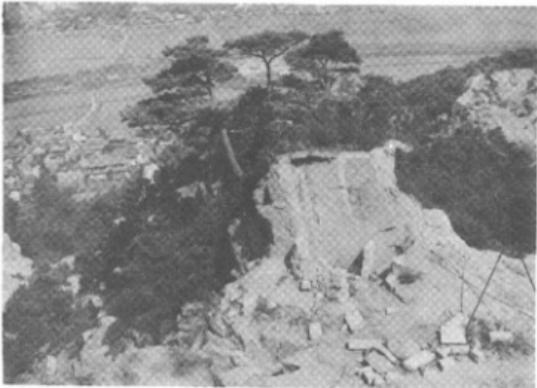
1550年代もしくは1560年代初頭の富山城の城郭様相、内容は、後の近世城郭に量的には及びもしないものであるが、城郭建築物の永久性（瓦葺、土塁、石垣等）と城内での平時の日常生活—城郭の當時使用という近世城郭のもつ基本的要素を備えた城郭として存在していた。このことは、富山城が中世城郭の軍事機能だけの城郭から近世的城郭へ発展していることを示すものである。

16世紀中葉の備前は戦国争乱の最中であるが、一応松田氏が備前西部を支配し、その国人層を掌握していた。富山城は松田氏の岡山平野に於ける拠点として直轄的出城として存在し、戦略的にも備前西南部、備中東南部に対する抑えとして重要な存在価値があったと同時に、岡山平野に多く割据する国人層に対する支配体制の拠点として重要な意義をもっていたと考えられる。この重要性を担って富山城は、近世的城郭化され、国人層に対する強力な軍事拠点とされたのである。天文間末から永禄初年（1550年代）の松田氏の領内有力寺社の焼打ちは、それらのもつ中世的権威とその経済基盤である寺社領の破壊と解体を意味し、松田氏の支配体制の変革を示すものである。この動向の中での出城である富山城の近世的城郭化は、出城に於ける家臣団の構造的再編成を示す。それまでの中世的家臣団構成が、土地（農民）より離反した城郭専従武士に転化し、城（城主）を中心とした縦の系列に基づく從属的な家臣団構成に変革したことを意味するものであろう。このことは、松田氏の領域（国）支配体制が守護大名的支配体制から脱皮し、戦国大名的支配体制へ向かおうとすることの一現象的な表われではなかろうか。この意味で富山城が、松田氏の戦国大名化への一軍事的、政治的拠点とし、又、一役割りを担って近世的城郭の要素、内容をもつ城郭として出現したのである。同時にそれは、富山城が出城であるが故に可能であったのではなかろうか。

これまで一般的に、鉄砲伝来による破壊力の増大、戦闘形態の変化にともない城郭が堅牢化し拡大化したとみられているが、城郭の発達は多分に支配体制、機構の変化にともなうものであることが今回の調査で明らかにされた。勿論、鉄砲伝来の影響もその一要素であるが、城郭の変遷は社会的変革の要因に基づくものである。

## 2、保護の問題

富山城跡の所在する矢坂山一帯は、民間の採石、採土場となり、城跡東側、北側でも城跡の一部を含んで採石が現在おこなわれている。この現状から見ても保存対策を早急に計らねばならない。特に今回の発掘調査により、この城跡が室町時代の岡山平野に於ける重要な存在であり、中世の岡山の歴史に於いてそのもつ意義は近世の岡山城跡に決



第52図 北の丸残景

つして劣るものではない。さらに一部破壊を受けてはいるが、本丸、大手、二の丸、南出丸等の城郭主要部は残存し、石垣、土塁、礎石等の遺構も良好に残存し旧状を伝えている。したがって、近世城郭の岡山城出現以前の岡山に於ける近世の城郭として学術的にもそれらのもつ価値は極めて高いものである。

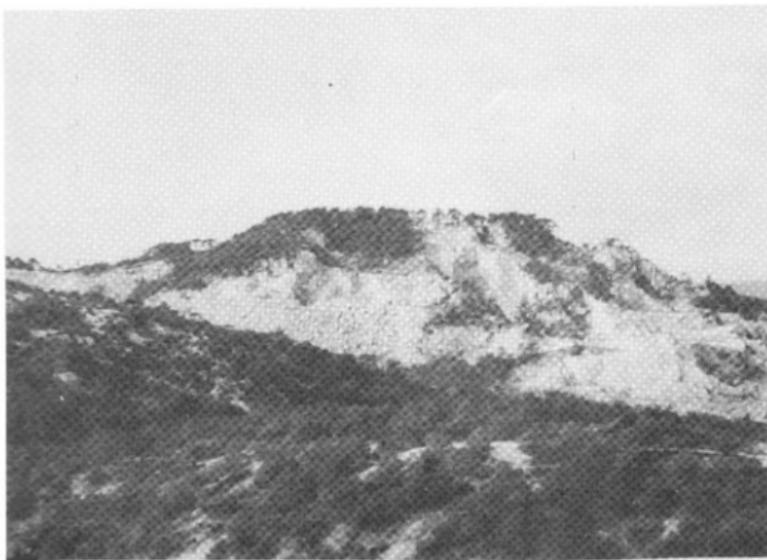
また、純然と城郭史の面からみても、中世城郭から近世城郭へ発展過程の様相、内容が層位的（時期的）に確認できる貴重な遺跡で、岡山県下でも数少ないものである。今回の調査で一部抽象的に、基礎的に明らかにされた事実は、石垣の構築一つを取ってみてもその変遷が、これまで一般的にいわれている城郭の石垣使用（永禄末年の二条城）より具体的な内容あるものであることを示している。この様な個々の事例を取ってみても富山城跡は、城郭史上に歴史的価値の高い資料を示すものであり、今回の部分的発掘結果だけでも城郭史上の一部の空白を埋めるものであろう。今後富山城の全面的発掘がおこなわれるなら、戦国時代から桃山時代の城郭史上の問題点のいくつかを解決できる重要な資料が示されるであろう。

この重要な価値をもち、又、岡山の歴史にかけがえのない城跡が、現在の採石、採土という企業活動の前に無策でさらされ、現状の採石進度でいけばこの数年内に城郭主要部も破壊されてしまうことは火を見るより明らかである。このままの状態で富山城跡が破壊されれば、まさに岡山の歴史の一部と文化遺産の喪失である。保存に際し、現実の企業の立場と保存の立場が本質に於て相反する次元に置かれている富山城跡の現状では、企業の善意にも当然限界がある。この両者の矛盾を放置しておいては、重要な城跡（遺跡）も日の目を見ずに消滅してしまうことは確実である。現実に城跡の破壊の危機は寸刻を争う状況に陥っている。このため早急に積極的な保存対策が構じられなければならない。この巨大な遺跡の保存に対し、国、県、市の根本的な保存対策を切望してやまない。

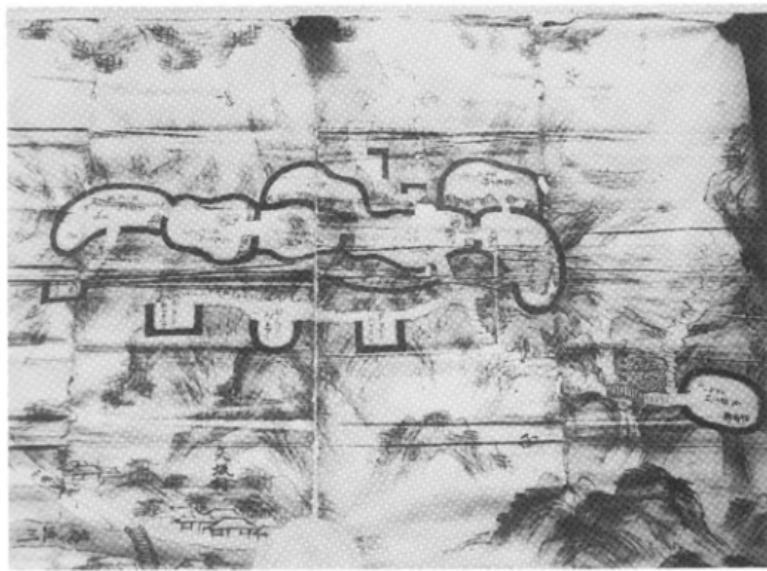
終りにあたり、本報告書作成に際して、特に岡山大学の水野恭一郎先生、岡山県総合文化センターの長光徳和先生に多大の御教示と御助言を頂いたことを記し、あわせて感謝の意を表したい。

（水内昌康、出宮徳尚）

註 ① 「富山城跡第1次調査報告」19頁、岡山市教育委員会、1968



① 富山城跡全景（東側）



② 富山城古絵図

図版第2



① 本丸礎石列



② 本丸礎石比較（左=浮田、右=松田、手前=たたき状）

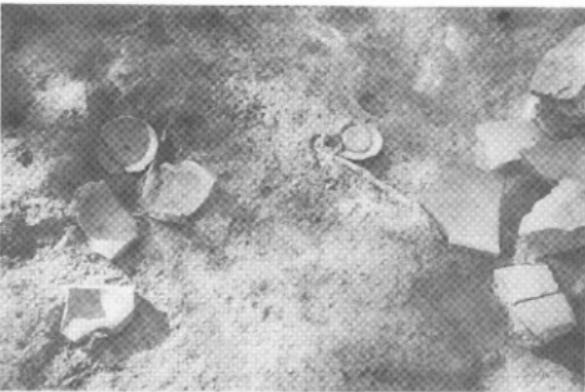


①本丸北上石垣（松田後期）



② 本丸北下石垣（浮田）

図版第4





① 本丸城門東側石垣（浮田）

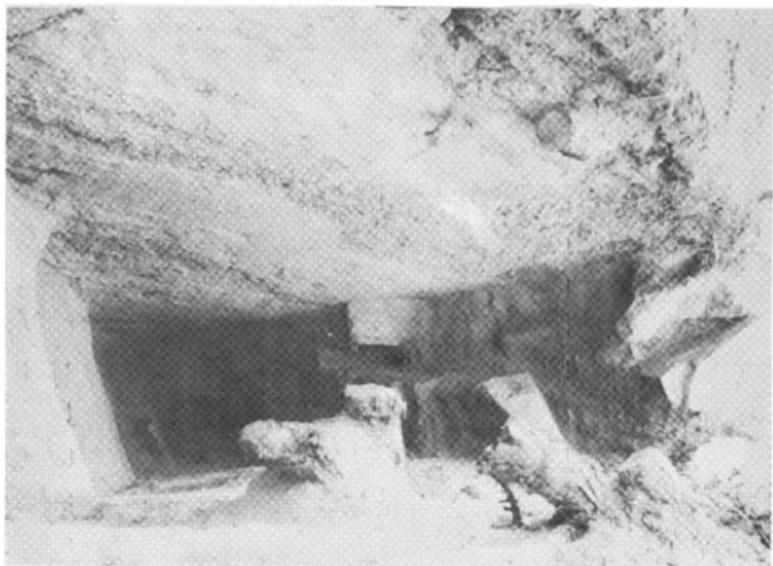


② 本丸城門奥仕切（浮田）

図版第6



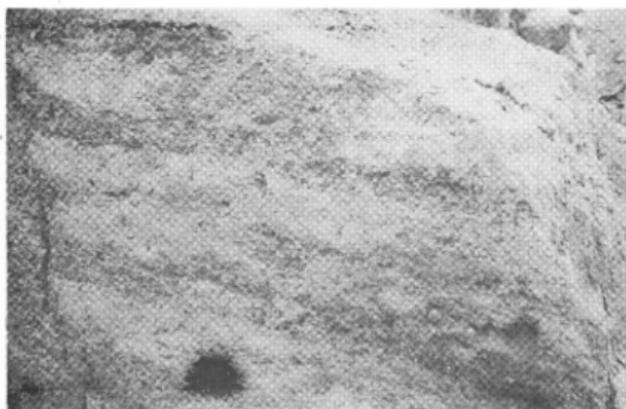
① 外舟形石（佐賀田村）



② 外舟形石（佐賀田村）

①

本丸北版築  
(松田後期)



②

本丸瓦出土状態  
(松田後期)



③

本丸遺物  
(支那錢片、カワラケ片  
等) 松田後期



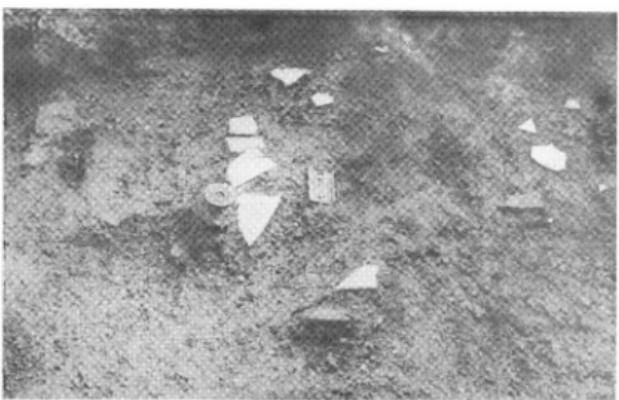
図版第8



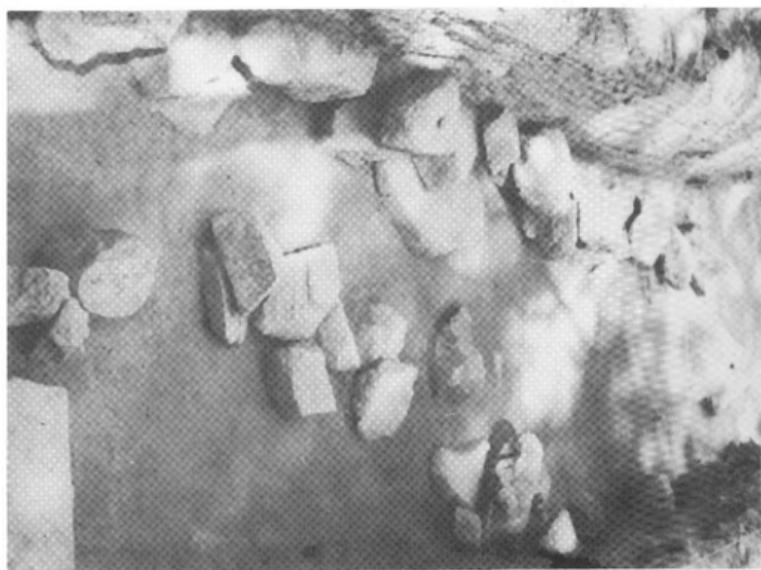
① 本丸カワラケ出土状態（松田後期）



② 本丸漆幕出土状態（松田後期）



③ 本丸磁器片、寶具留全具出土状態（松田後期）

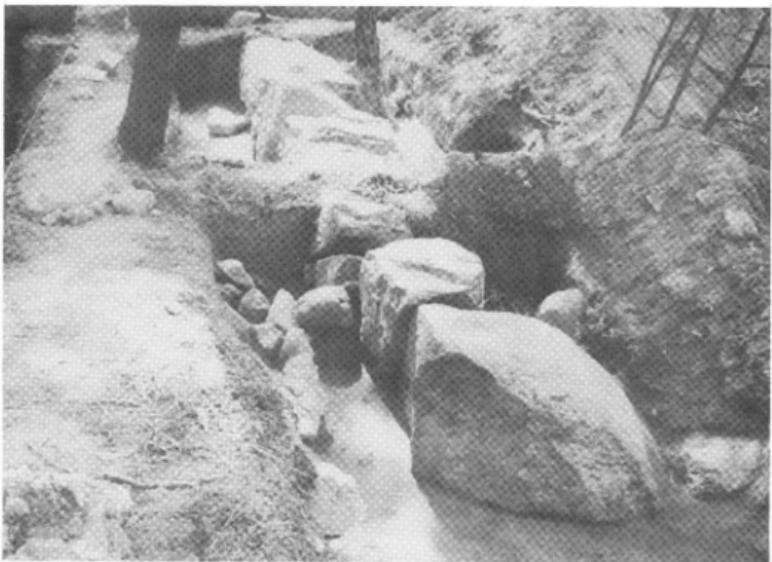


(三) 大中里遺跡 (田治)



(四) 大中里遺跡 (田治)

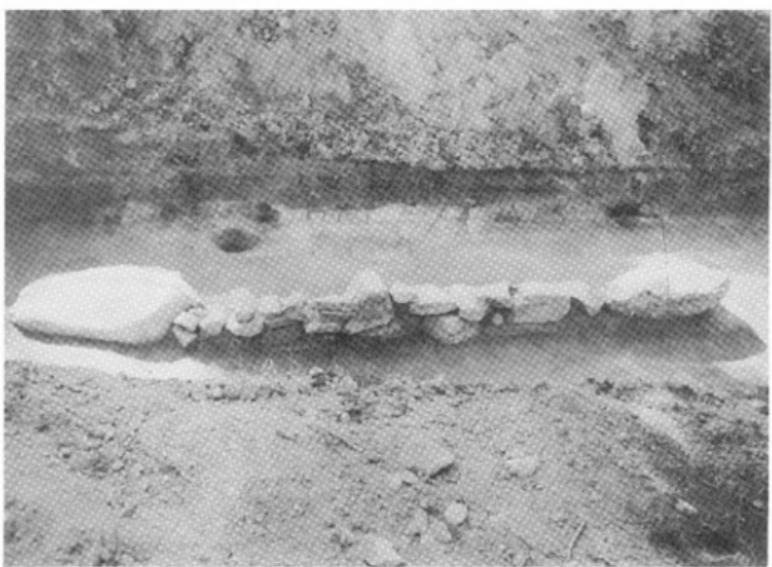
図版第10



① 大手曲輪石壘状列石



② 同上



① 大手曲輪地形基礎 (浮田)



② 大手曲輪池 (一部) (浮田)

図版第12



① 大手曲輪石（O・ト）西門跡付近（田原）



② 大手曲輪瓦圧土状状（田原）

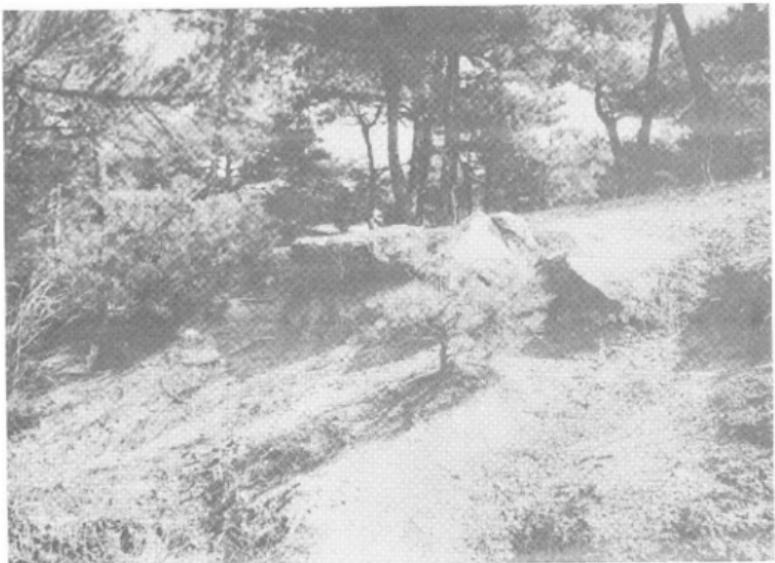


① 大手曲輪コ字形石組（浮田、手前の石は乱積で取り除ける）



② T<sub>e</sub>-中トレンチ西壁（柱穴等）（松田後期）

図版第14



① 二の丸上石垣



② 二の丸下石垣



① 1の丸泡



② 1の丸泡前焼出土状態



③ 同上内の器底

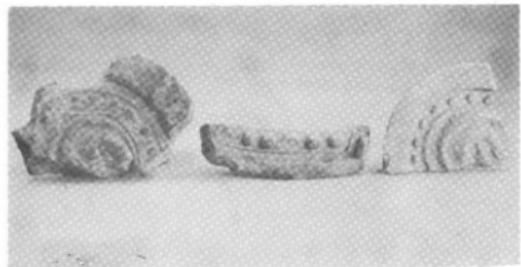
図版第16 遺物瓦 (浮田)



① 軒丸瓦



② 稚児棟鳥衾瓦



③ 軒丸、軒平瓦



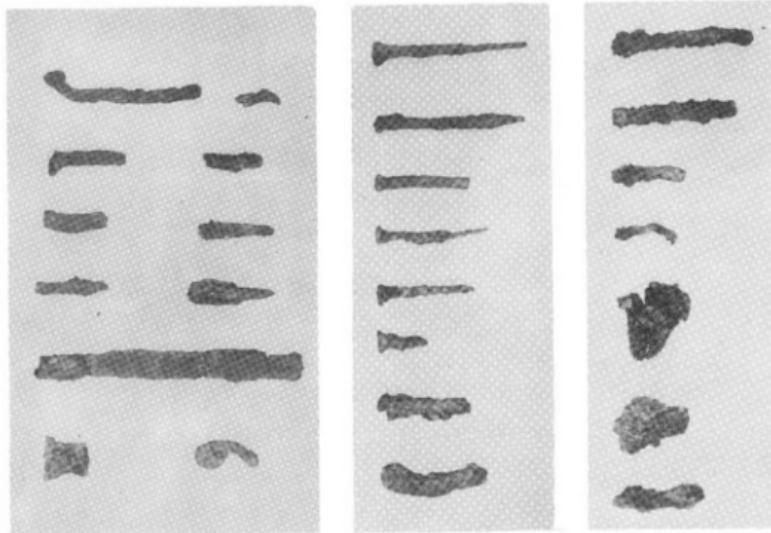
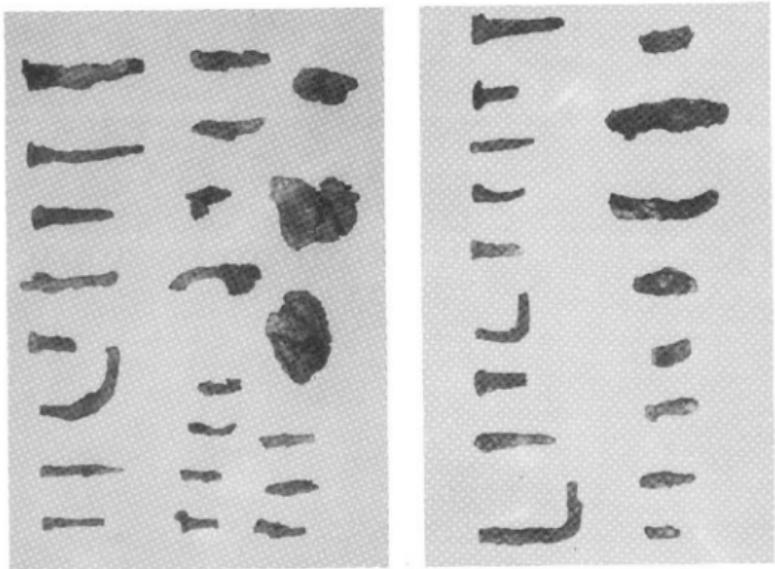
④ 軒平瓦



⑤ 軒丸、軒平瓦



⑥ 軒平瓦



本丸 鐵釘・鐵片等(浮田)